

8 高等教育機関合同公開講座



「函館学」

前期：函館の歴史を探る
第4回

「箱館戦争—戊辰戦争最終戦」

講師 函館市総務部市史編さん室

参事 紺野哲也

開催日時：平成18年9月23日（土）午後2時～3時30分

開催場所：函館市中央図書館 大研修室・中研修室

箱館戦争—戊辰戦争最終戦—

1 鳥羽伏見の戦い勃発(なぜ戊辰戦争が勃発したか)

前史

- (1) 15代将軍徳川慶喜が大政を奉還する(しかし慶喜は外交は担当する宣言)
- (2) 大政復古を行う(薩長が倒幕を決意し策謀する)
- (3) 薩討表を朝廷を提出しようとする
- (4) 鳥羽伏見の戦いが勃発する
- (5) 徳川慶喜開陽丸で江戸へ逃げ帰る

2 榎本釜次郎らはなぜ箱館に来たか

- (1) 徳川慶喜が謝罪に転じる
- (2) 徳川家の存続が決まる
- (3) 東北戦争の決着
- (4) 鷲の木に来る(箱館港に入らずに箱館に来るには最も近い所)
- (5) 榎本釜次郎らが最初に連絡を入れた所(箱館駐在の各国領事館)
- (6) 峠下から戦闘となる
- (7) 松前藩は新政府と行動を共にする(旧幕府脱走軍と松前藩の戦闘)
- (8) 旧幕府脱走軍が蝦夷地を掌握する

3 新政府軍の攻撃

- (1) 局外中立の解除
- (2) 箱館府知事清水谷公考を青森口総督とする
- (3) 翌年雪解けを待った新政府軍は乙部から攻撃を開始(旧暦4月9日=5月20日)
- (4) 箱館総攻撃(旧暦5月11日=6月19日)
- (5) 箱館戦争最後の戦闘(千代ヶ岱陣屋の戦い—旧暦5月16日=6月25日)
- (6) 降伏

資料 (13枚)

- 1 鳥羽伏見の戦いへの経緯説明資料(2枚) 1~2
- 2 鳥羽伏見の戦いから榎本釜次郎以下が品川沖を脱走する迄の概要説明資料(4枚) 3~6
- 3 榎本釜次郎以下が品川沖を脱走してから降伏までの迄の概要説明資料(4枚) 7~10
- 4 旧幕府脱走軍組織図(1)(2) 11~12
- 5 新政府軍組織図 13

鳥羽伏見の戦いへの経緯説明資料(「維新史料綱要」を中心に)

慶応3年10月13日	征夷大將軍徳川慶喜、在京十萬石以上諸藩の重臣を二条城に召集し、大政奉還決意書を示して諮問し、且、其藩主の上京を命ず。鹿兒島藩主小松帶刀・高知藩主後藤象二郎・広島藩主辻将曹・岡山藩主牧野権六郎・宇和島藩主都筑莊藏、特に慶喜に謁して、直に奏請せんことを勸説す
慶応3年10月14日	征夷大將軍徳川慶喜、上表して大政を奉還せんことを請ふ。中務卿熾仁親王(有栖川宮)・彈正尹朝彦親王(賀陽宮)・太宰帥熾仁親王(有栖川宮)・常陸太守晃親王(山階宮)・摂政二条齊敬・左大臣近衛忠房・右大臣一条実良等に参朝を命じ、其措置を議せしむ
慶応3年10月15日	征夷大將軍徳川慶喜、参内す。詔して大政奉還の請を允す。乃ち令して、政務委任の条目を定め、且十萬石以上の諸侯に上京を命じ、特に前名古屋藩主徳川慶勝・前福井藩主松平慶永・鹿兒島藩主茂久生父島津久光・前宇和島藩主伊達宗城・前高知藩主山内豊信・広島藩主浅野茂長・前佐賀藩主鍋島齊正・岡山藩主池田茂政を召す
慶応3年10月15日	幕府、外国奉行石川利政「河内守」に兵庫奉行、外国奉行並糟谷義明「筑後守」に新潟奉行を兼ねしむ
慶応3年10月16日	幕府、在京十萬石以上諸藩の重臣及麾下士を二条城に召し、大政奉還勅許ありしことを示達す
慶応3年10月17日	征夷大將軍徳川慶喜、書を上りて外交事務の緊要なるを陳じ、事あらば在京諸侯及諸藩重臣を召して議せしめんことを請ひ、且曩日「十五日」の朝命の三事に就て、疑義を候す。「十九日、指令あり
慶応3年10月20日	征夷大將軍徳川慶喜、書を仏国全權公使ロッシュに贈り、幕府成立の由来と、這次、大政を奉還するに至りたる心事とを告げ、其厚誼を謝し、尚一層の尽力を囑す
慶応3年10月24日	二十四日、徳川慶喜、上表して、征夷大將軍を辞す
慶応3年10月27日	幕府、江戸開市場外国人人居留規則、及び運送船等規則を定め、之を各国公使に謀り、且外国人居留地域外に夜行するときは、必ず我護衛者を附するを告ぐ
慶応3年11月1日	京都守護職会津藩主松平容保、大政奉還に因り其進止を幕府に候す。批して姑く旧に仍らしむ
慶応3年11月2日	二日、大給乗讓「縫殿頭○田野口藩主、後龍岡と改称す、食封一万六千石、時に松平氏を称し、幕府老中、外国總裁たり」、稻葉正己「兵部大輔○館山藩主、正善の養父、時に幕府老中格、海軍總裁たり」、京に至る。「二条摂政記
慶応3年11月2日	幕府、目付支配書役渋沢成一郎「喜作」を奥右筆格に、同水島三四造を勘定格に班す
慶応3年11月2日	外国奉行川勝広道「近江守」、在仏外国奉行栗本鯉「安芸守」に大政奉還の事情を報じ、之を仏国外務大臣及同国駐紮締盟各国公使に演述せしむ。又同じく書を名譽総領事エテールに致し、之を告ぐ
慶応3年11月6日	幕府、兵庫開港に依り、京都の周囲10里以内の地を除き、外国人の兵庫より10里以内の地の遊歩を許可せしを兵庫附近の幕領・私領及寺社領に布達す
慶応3年11月10日	英国特派全權公使パークス、幕府の招聘せる海軍伝習士官等の到着せるを幕府に報じ、備聘契約に関し、更に照会する所あり。尋で「17日」幕府、之に答ふ
慶応3年11月15日	高知藩主坂本龍馬「直柔・変名才谷梅太郎・贈正四位」・同中岡慎太郎「道正・変名石川清之助・贈正四位」、京都河原町龍馬の寓舎に於て、京都見廻組佐佐木唯三郎等に襲撃せられ、龍馬は即死し、尋で「十七日」慎太郎も亦逝く。賊あり、阪本直柔「龍馬」、中岡道正「慎太郎○並に土佐藩士」を刺す
慶応3年11月24日	若年寄並兼外国総奉行平山敬忠、順動丸に搭じて上坂す
慶応3年11月25日	幕府、東北諸藩に令し、其土民の唐太島を開拓し、及び其地に移住するを許す
慶応3年11月26日	元左近衛権少将東久世通禧、微行して長崎に至る。「十二月十日帰る
慶応3年12月6日	群盜江戸府内を横行劫掠し、是日、賊徒多数、靈岸島町の商家を侵す。撤兵差図役勤方春日鉄三郎等、往て之を鎮緝す。明日、幕府、鉄三郎等を賞す
慶応3年12月7日	兵庫港を開て貿易場と為す、又大坂互市場を開く、兵庫碇泊の各国船艦、皆祝砲を發す。「指華入京日載
慶応3年12月7日	英国特派全權公使パークス、大坂・兵庫の開市・開港を居留同国臣民に布告す
慶応3年12月9日	前日の朝議、今晚に撤し、摂政二条齊敬以下諸員漸く退朝す。天皇、御学問所に出御、勅諭を賜ひ、王政の古に復し、仮に總裁・議定・参与の三職を置き、神武創業の始に原きて、庶政を更革するの聖意を論したまふ。是夜小御所に臨御、總裁・議定・参与各員を召し、大政一新の基本を肇設し、万世不拔の国是を建定せんが為に公議を尽さしむ。議、徳川氏処分事に及び、議論沸騰、深更に及んで漸く決し、宸裁を経、慶勝・慶永をして大將軍辞職允許及退官納地を慶喜に論さしむ
慶応3年12月10日	議定徳川慶勝・同松平慶永、二条城に登り、元征夷大將軍徳川慶喜に朝旨を伝ふ。時に城中、兵馬填湊、頗る喧擾す。慶喜、大將軍辞官・納地の事は衆情の鎮静を待ちて奉答せんことを請ふ。夜に入り、慶勝・慶永復命し、朝議、之を容る
慶応3年12月10日	旧幕府、遊撃隊・銃隊・撤兵等に命じ、江戸市中を警邏せしむ
慶応3年12月14日	元征夷大將軍徳川慶喜、本日を以て仏国全權公使ロッシュとの会見を約す。英国特派全權公使パークス、之を開き、明日会見すとの通告を無視し、押して大坂城に登る。慶喜、即ちロッシュ・パークスと会見し、下坂の事情を告ぐ
慶応3年12月15日	旧幕府、若年寄大河内正質を老中格に、若年寄権永井尚志を若年寄に任ず
慶応3年12月16日	朝議、議定松平慶永に命じ、同徳川慶勝と共に元大將軍徳川慶喜に辞官・納地の朝命奉承を促さしむ。慶永及議定山内豊信等、参与中根雪江「慶永家臣」・同後藤象二郎「豊信家臣」をして参与岩倉具視に就き、慶喜寛宥の命を請はしむ。是日、具視、為に慶喜奏状の擬案を内示す
慶応3年12月16日	元征夷大將軍徳川慶喜、大坂城に仏国全權公使ロッシュ・英国特派全權公使パークス・米国弁理公使ファン・ファルケンブルグ・伊国特派全權公使ラ・ツール・普国代理公使フォン・プラント・蘭国総領事ファン・ポルスブルックを引見し、大政奉還より王政復古に至る顛末を告げ、各国との交際はなお其責に任ずるを以て、益交誼を厚うせんことを望む旨を陳ぶ。
慶応3年12月21日	英国特派全權公使パークス、大坂城に至り、元大將軍徳川慶喜に會す ※パークスSir Harry Smith Parkes [1828—85] イギリスの外交官、幕末維新期の駐日イギリス公使。イングランドのスタッフオードシャーに生まれる。1841年、中国のアヘン戦争に従軍、44年に厦門(アモイ)で通弁官となり、以後福州、上海、厦門、広東と転勤し、54年厦門領事に就任し、翌年全權委員として英・タイ条約を締結し、56年には広東領事代理となる。アロー戦争(第二次アヘン戦争)では、1860年英仏連合軍に加わって従軍したが捕虜となる。65年(慶応1)5月、初代駐日公使オールコックの後任として日本に赴任し、駐日全權公使に就任し、83年(明治16)までその職にあった。その間、その政治的手腕を発揮して幕末諸条約の勅許や改税約書の調印に成功し、また江戸城開城を斡旋した。彼の対日外交政策は、激動する維新期の日本の政局の渦中において、日本に開明的な政府を樹立させ、これを支援して政局を安定させ、完全な開国を実現させ、自国の利益の貫徹を図るといふ、いわゆる開化憑憑政策ともいふべきもので、武力を背景に開国と自由貿易政策を強要する砲艦政策(ガンボート・ポリシー)を一枚脱皮した政策であった。彼はそのため、薩摩や長州の開明的政治勢力に接近してこれを支援し、倒幕・明治新政府樹立の政治路線の推進に大きな役割を果たした。この点では、幕府を援助して將軍権力の絶対主義路線を支援し自国の政治的優位を確立しようとしたフランス公使ロッシュと対立的関係にあった。パークスは戊辰戦争では局外中立を表明し、列国の外交団をこれに追隨させ、また明治政府を最初に承認して、その後も、成立直後の新政府が対外的難局に直面すると、助言を与えて政治的基盤の確立に力を貸し、日本に対する自国の指導的立場を固めることに尽力した。1883年1月に駐清公使に転じ、84年駐韓公使を兼ね、85年北京で没した。[加藤榮一](『日本大百科全書』)
慶応3年12月23日	旧幕府、令して、三千石以上以下勤仕並寄合をして銃隊を編せしめ、且諸藩及麾下士の静寛院宮・天璋院等非常警守の任に在る者を西丸下に屯せしめ、以て変に備へしむ。又江戸城諸門の出入を戒厳し、西丸裏門を閉鎖せしむ
慶応3年12月25日	二十五日、万機親裁、公議博採の論旨を、三条橋に掲示す。「復古記」

慶応3年12月27日	前権中納言三条西季知・同三条実美・前左近衛権少将東久世通禧・前侍従四条隆諤・前修理権大夫壬生基修、入京、参内す。乃て実美を議定と為し、通禧を参与と為す
慶応3年12月30日	在坂旧幕府老中板倉勝静等、書を在府同小笠原長行に致し、元大將軍徳川慶喜の大將軍職辭職勅許及慶喜並に同夫人の称号変更のことは、外交上支障を生ずるを以て之を各国公使等に通告すべからざること及仏国伝習士官シヤノワン等を速に上坂せしむべきを告ぐ。是日、長行、書を復して旨を諒し、シヤノワン等来月2日發途すべきを告ぐ。
慶応3年12月30日	江戸薩摩藩邸襲撃の事漸く伝播す、是夜、旧幕府、及ひ薩摩藩に内諭して、為に罅隙を開くこと勿らしむ
慶応3年12月30日	都下の豪商三井某等4人、金を献する差あり。「三井三郎助、島田八郎左衛門各千両、小野善助、小野善右衛門2名で千両
慶応4年1月1日	前内大臣徳川慶喜、江戸の変報「事は前年十二月二十五日に在り」を聞き、討薩表及薩人の罪状を草し、旧幕府大目付滝川具举「播磨守・兼陸軍奉行」に命じ、之を齎して京都に至らしめ、檄を諸藩に移して其兵を徴し、將に大挙入京せんとす。乃ち先づ諸隊警備の部署を定む
明治1年1月3日	徳川慶喜、既に徳川慶勝、松平慶永をして、奉命書を上らしむ、適江戸薩摩藩邸襲撃の報を得たり、是に於て、討薩表及ひ薩人の罪状を舛し、滝川具举（ともたか）「播磨守○大目付」を遣して之を奉し、又之を諸藩に示して、大に其兵を徴集す「具知、遂に京に入るを果さず、退て淀城に留る、五日に至り、戸田忠至に因て奏状を上る事、五日の条に見ゆ」、慶喜、又兵士を部署し、会津、桑名二藩兵を以て、先鋒と為し、召命に赴くと称して、伏見、鳥羽道に向ふ、大河内正質「豊前守○大田喜藩主、食封二万石、時に松平氏を称す、○老中格」、鳥羽の兵を統へ、竹中重固「丹後守○陸軍奉行」、伏見の兵を統ふ、重固伏見に抵り、書を薩營に贈て、將に京に入らんとするを告ぐ、答書して朝命を俟しむ、鳥羽の守兵も亦、其朝命なきを以て之を止む。

鳥羽伏見の戦いから榎本釜次郎以下が品川沖を脱走する迄の概要説明資料(『維新史料綱要』を中心に)

明治1年1月2日	旧幕府軍艦開陽丸・蟠龍丸、鹿児島藩軍艦平運丸を兵庫沖に砲撃す。尋で「四日」鹿児島藩軍艦春日丸・翔鳳丸及平運丸、兵庫を脱出。開陽丸、之を阿波沖に追撃す。「翔鳳丸、阿波由岐浦に擱座自焼し、春日丸は逃れ、平運丸は別路を、共に鹿児島に還る
明治1年1月3日	毛利敬親「大膳大夫○長門藩主」、鷲尾隆聚「侍従○時に高野山に屯す」に命じて、大坂城を伐たしめ、隆聚に錦旗を賜ひ、因幡藩兵及び支藩兵に伏水に赴かしめ、徳川茂承「中納言○紀伊藩主」をして官軍を糾合せしむ、又因幡、備前二藩をして征討兵を備へ、且備前藩に西宮を厳守し、稲田邦植「九郎兵衛○阿波藩老臣」に応援を為さしむ。(伏水口戦記)
明治1年1月3日	参与大久保一蔵「利通・鹿児島藩士」、書を上りて、朝議の因循を非難し、速に徳川氏討伐を断行し、以て朝権を確立せんことを切言す。又作戦の方略を議定岩倉具視等に示し、其決断を促す
明治1年1月3日	会津・桑名二藩及旧幕府諸兵、前内大臣徳川慶喜召命に赴くの前駆と称し、伏見・鳥羽二道より進んで京都に入らんとす。旧幕府陸軍奉行竹中重固「丹後守」、伏見口の兵を統べ、書を鹿児島藩陣営に致し、道を開かんことを求む。同藩の守兵、書を復して朝命を俟たしむ。旧幕府大目付滝川具挙(ともたか)、討薩表を齎して鳥羽に至る。鹿児島藩兵、朝命なきを以て入京を拒む。既にして旧幕府陸軍奉行取扱大河内正質「豊前守・老中格・大多喜藩主」の率いる旧幕兵、相踵(あいついで)鳥羽に至る
明治1年1月3日	旧幕府諸兵の北上を上聞す。乃ち百官朝集の命を發し、前内大臣徳川慶喜の入京を停め、又議定徳川慶勝・同松平慶永に諭して、旧幕兵を措置せしめ、鹿児島・萩・高知三藩に令して、事変に應ぜしめ、広島藩兵を伏見へ急行せしむ
明治1年1月3日	鳥羽口の鹿児島藩兵、進んで小枝橋「山城国紀伊郡下鳥羽村」を渡り、陣を城南宮「同上」一帯に布き、變に備ふ。申刻、旧幕兵、来り迫る。守兵、撃つて之を卻く。伏見口の旧幕兵、亦奇しく進む。鹿児島・萩三藩兵、邀撃して之を破る
明治1年1月3日	津藩主藤堂高猷「和泉守」・淀藩主稻葉正邦「美濃守・旧幕府老中」に諭して、方向を誤ること勿らしむ
明治1年1月3日	是夜、旧幕兵、大坂「土佐堀」鹿児島藩邸を襲ふ。藩人、邸を焚いて遁る
明治1年1月3日	旧幕府老中酒井忠悳「雅楽頭・姫路藩主」・同板倉勝静「伊賀守・備前中山藩主」・老中格大河内正質、大坂在留の英・仏・米・蘭・普・伊六国使臣に牒して、鹿児島藩と交兵の事由を告げ、各其国民をして条約を確守し、軍艦兵器を私売し、不開港場に繋船すること勿らしむ
明治1年1月3日	本願寺新門主光威「前大僧正・徳如」・東本願寺門主光勝「前大僧正・徹如」、各其門徒を率いて参朝す。乃ち、光威に九門内外の巡邏及狼ヶ辻の警守を命ず。光勝、金千両を献ず。尋で「四日」、本願寺門主光沢「前大僧正・広如」も亦金
明治1年1月3日	夜半、議定嘉彰親王「前名純仁・仁和寺宮」を以て軍事總裁を兼ね、議定伊達宗城・参与東久世通禧「前左近衛権少将」同鳥丸光徳「侍従」に軍事參謀を兼ねしむ。又参与橋本実梁「左近衛権少将」参与助役柳原前光「侍従」をして大津口の兵を督し、参与西園寺公望「右近衛権中將」をして丹波口の兵を督せしむ
明治1年1月4日	議定兼軍事總裁嘉彰親王「仁和寺宮」を征討大將軍に補し「議定故の如し」、錦旗・節刀を賜ひ、参与四条隆謨・参与助役五条為榮をして錦旗奉行を兼ねしめ、鹿児島・萩・広島三藩に令し、各兵を出して之に従わしむ。
明治1年1月4日	旧幕府、江戸近侍の諸藩に令して鹿児島藩人に備へ。又諸國の守備を厳にせしむ
明治1年1月4日	参与西園寺公望を以て、山陰道鎮撫総督と為し「参与故の如し○西園寺公望家記」、薩、長二藩兵を以て之に属し、本道の諸藩に令して、其指揮を受けしむ、又丹波、丹後、但馬の諸侯に諭して、王事を勤めしむ
明治1年1月5日	旧幕府若年寄並平山敬忠「図書頭」、在坂の諸藩に鹿児島藩と干戈を交ふるに至りし事情を陳弁す
明治1年1月6日	旧幕府老中酒井忠悳・同板倉勝静、大坂在留の英・仏・米・蘭・普・伊六国使臣に牒して、其兵利あらざるを告げ、各其國旗を自衛せんことを求む
明治1年1月6日	是夜、前内大臣徳川慶喜、大坂城を出で、軍艦開陽丸に搭じて江戸に帰る。会津藩主松平容保・桑名藩主松平定敏・旧幕府老中酒井忠悳・同板倉勝静等、之に従ふ。慶喜、去るに臨み、奏状を名古屋・福井二藩に託し、又東帰の情由を諸藩に布告す。旧幕府老中格大河内正質・同大坂城代牧野貞直「越中守・笠間藩主」等も亦大坂を去る
明治1年1月6日	東本願寺光勝に命じて、大津に至り、官軍の糧食を措けし、且つ東國の門徒を勸励せしむ、又興福寺の僧侶に命し、伊賀一路東兵の状を謀せしむ
明治1年1月7日	七日、百官諸侯を会して、徳川慶喜の反状を告示し、征討の令を發し、諸侯をして其去就を決せしむ
明治1年1月8日	旧幕府老中格大河内正質及旧幕府の敗兵、前後紀伊に至り、海路東航す。尋で、和歌山藩、旧幕兵の來投を拒絶せしこと
明治1年1月9日	旧幕府老中の江戸に在るもの、伏見の戦報を聞き、諸藩を戒めて、急に西上の備を為しむ
明治1年1月9日	九日、征討大將軍嘉彰親王を以て外国事務總裁を兼ね、牙宮を坂城に置いて、四方を指揮せしめ、徳川慶勝、松平慶永をして坂城を点檢し、大將軍を迎へしむ。是日、大將軍、淀城を發して、牧方に至る。(伏水口戦記)
明治1年1月10日	前内大臣徳川慶喜・会津藩主松平容保・伊予松山藩主久松定昭「伊予守」・高松藩主松平頼聡・桑名藩主松平定敏・備前中山藩主板倉勝静・大多喜藩主大河内正質及旧幕府若年寄永井尚志「女善頭」・同並兼外国總奉行平山敬忠「図書頭」・同並兼陸軍奉行竹中重固「丹後守」・同並兼外国總奉行塚原昌義「但馬守」・大目付戸川安愛「伊豆守」・勘定奉行小栗政寧「下総守」・同並星野成美「豊後守」・大坂町奉行松平信敏「大隅守」・目付新見正典「相模守」・同設楽能棟「備前守」・同榎本道章「対馬守」・同大久保忠恒「筑後守」・同岡部肥前守・陸軍奉行並大久保忠恕「主膳正」・同高力主計頭・同戸田肥後守・歩兵奉行並牧野土佐守・銃隊奉行大久保教寛「能登守」・前京都見廻役小笠原河内守・側衆室賀正容「甲斐守」の官位を褫ぎ、容保・定敏・頼聡・定昭・勝静・正質の京都藩邸を没し、其在京藩兵を逐ひ、小浜藩主酒井忠氏・大垣藩主戸田氏共・宮津藩主本莊宗武「弾正忠」・延岡藩主内藤政拳「備後守」・鳥羽藩主稲垣長行「平右衛門・後信濃守」の入京を停む
明治1年1月10日	徳川慶喜征討の令及旧幕府領地を以て直管と為すの布告書を、三条・荒神口二橋に掲げ、士民の賊徒に通ずるを禁ず
明治1年1月12日	旧幕府、徳川慶喜の江戸城帰還及江戸城諸郭門の閉鎖を各国公使館書記官等に告ぐ
明治1年1月12日	徳川慶喜、松平容保、松平定敏、板倉勝静、酒井忠悳等を率いて、江戸城に還り、東帰の情由及び後日の形勢に因り、再び西上するの意を列藩に告ぐ、又諸郭門を鎖し、之を各国書記官に報す
明治1年1月14日	旧長崎奉行河津祐邦「伊豆守」、上國の報を聞き、其變あらんことを恐れ、援を各国領事に請ふ。是日、後事を筑、肥二藩土に託し、厲史を率て、海路江戸に帰る
明治1年1月16日	仏・英・伊・米・普・蘭・六国使臣、書を外国事務取調掛東久世通禧に致し、神戸事變の謝罪及暴行隊長の極刑を要求す
明治1年1月16日	是より先、徳川氏譜第諸藩の藩士及幕府麾下士等、開成所「江戸」に会し、徳川氏の為恢復を謀る。是日、徳川慶喜に面して再挙を懇懇せんとす。慶喜、肯て見ず。会津藩主松平容保・桑名藩主松平定敏等、亦慶喜に再挙を勧告す。慶喜、從はず
明治1年1月18日	是より先、旧長崎奉行河津祐邦官守を棄て去る。時に土佐藩士佐々木高行「三四郎」、薩摩藩士松方正義「助左衛門」等、本地に在り、變を聞き、馳せて奉行邸に抵り、僚吏を諭し、衆庶を安撫し、肥、筑以下十三藩士と謀り、會議所を置き、権に内外の事務を管理し、急に状を京師に奏す。是日、又之を各国領事に告ぐ
明治1年1月18日	旧幕府麾下士勝義邦、官軍三道東下するを聞き、書を沿道の諸侯に致して、其首鼠兩端を持するを責め、若し兵を率いて東下することは、直に軍門に進で、是非曲直を問はんとするを陳す
明治1年1月20日	徳川慶喜、書を静寛院宮(14代將軍徳川家茂夫人親内親王(和宮))に呈し引責致仕の意を陳じ救解を請ふ。宮乃ち侍女土御門藤子を京都に遣し書を権大納言橋本実麗父子に致して徳川氏の為に哀を請はんことを託し副ふるに慶喜の哀請書を以てす。尋で、宮、再び書を実麗父子に贈りて、王師東下の際に処するの決意を告ぐ
明治1年1月20日	徳川慶喜、旧幕府老中板倉勝静と共に会津藩邸に臨み、藩兵及新撰組の伏見役負傷者を慰問す
明治1年1月21日	外国事務総督東久世通禧、仏、英、伊、米、蘭、六国公使に移書し、其國人の兵器船艦を徳川慶喜、及び其臣属に、販売貸与するを禁す
明治1年1月21日	徳川慶喜、書を議定松平慶永及熊本藩主細川慶順父子等に寄せ、退隱の決意を告げ、救解を請ふ。尋で「29日」慶永、其書を上る

明治1年1月22日	旧幕府、陸軍奉行並駒井信興「相模守」を大目付と為し、軍艦頭並肥田浜五郎・同伴鉄太郎・同内田恆次郎「正雄」を軍艦頭と為し、軍艦役沢太郎左衛門「貞説」・同松岡盤吉・同塚本桓輔・同甲賀源吾「秀虎」を軍艦頭並と為す
明治1年1月22日	米国外務省書記官ポートマン、書を旧幕府老中に致し、徳川慶喜の討薩表写を得て、之を本国政府に報せんと請ふ。「二十一日」是日、旧幕府、之を贈る
明治1年1月25日	英・米・蘭・仏・伊・普六国使臣、其国人に局外中立を布告す
明治1年1月26日	旧幕府、江戸諸郭門の閉鎖を解きしことを各国公使館書記官に報ず
明治1年1月26日	仏国全権公使ロッシュ、江戸城に至り、仏国皇帝ナポレオン三世の答書を徳川慶喜に呈す
明治1年2月5日	旧神奈川奉行、各国公使局外中立を布告するを慶喜に報し、又其文中御門陛下と大君との間に戦闘起るの語あるを以て、之を改削せしめんと請ふ
明治1年2月5日	前福井藩主松平慶永、徳川慶喜退老の奏状に自責の意なきを以て之を卻け、家老本多修理「敬義」を江戸に遣して、謝罪の実を表せんことを懇請せしむ。尋で「六日」、又書を旧幕府会計総裁大久保忠寛等に致して其意を申ぬ
明治1年2月7日	旧幕府歩兵並及麾下士等、夜に乗じて上野「江戸」及市内各所に嘯集し、市民を劫掠す。久留里・壬生・安房勝山等諸藩の守兵、之を鎮輯す。歩兵、奥州街道に走り、其他江戸を脱する者多し。尋で、旧幕府、歩兵差込役頭取古屋佐久左衛門「智珍」を遣して脱走兵を招諭せしめ、且陸軍奉行等に令して暴行者を緝捕せしむ
明治1年2月12日	徳川慶喜、江戸城を徳川慶頼「中納言〇時に田安と称す」、松平齊民「越後守、確堂と号す、津山藩主慶倫の父」に託し、退て東叡山大慈院に入り、入道公現親王「輪王寺宮」を見て、罪を京師に謝せんことを請ふ
明治1年2月16日	松平容保、謝状を松平慶永に託し、咎を引き、自ら責め、退隠屏居し、以て徳川慶喜の罪を宥せんことを請ふ、是日、江戸を去りて、会津に帰る
明治1年2月16日	東海道先鋒総督府、東本願寺門主光勝に命じて、軍費「金三万両」を供給せしむ
明治1年2月19日	松平定敬、書を入道公現親王に呈し、徳川慶喜の為に救援を請ふ
明治1年2月20日	旧幕府領書「天領と称せしもの」を直管と為すを以て、吏を發して土民の情実を監察せしむ。因て大洲・龍野・丹後田辺・福知山・高鍋・園部・水口・足守・綾部・西大路・三日月・宇都宮支「高德」藩に命じて、藩士の吏務に長ずる者「二・三名」を薦挙せしむ。尋で之を諸道に分遣す
明治1年2月21日	徳川慶喜の謝罪表を卻け、松平慶永に諭して、罪を大総督に乞はしむ
明治1年2月23日	初めて太政官日誌を刊刻す。後之を裁判所・鎮撫使及諸藩に頒つ
明治1年3月9日	旧幕府歩兵差込役頭取古屋佐久左衛門「智珍」歩兵千八百許人を率いて將に信濃に赴かんとす。東山道官軍先鋒の鹿兒島・萩・大垣三藩兵、梁田駅「下野国足利郡」に邀撃して之を破る。佐久左衛門等、会津に走る。明日、東山道先鋒総督府、前橋・忍・岡部・岩槻・武蔵金沢・高崎・沼田・安中・小幡・七日市・吉井・宇都宮・大田原・足利・鳥山・吹上・佐野・喜連川諸藩に令して、其余党を勦討せしむ
明治1年3月9日	旧幕府麾下土山岡鉄太郎「高歩」駿府に至り、大総督府参謀西郷吉之助に就いて徳川慶喜の為に哀を請ふ。旧幕府陸軍総裁勝義邦「安房守」亦書を吉之助に致して其情を陳ず。大総督府、乃ち謝罪の目七条を挙げ、義邦・鉄太郎及旧幕府若年寄大久保忠寛「一翁」をして速に其実効を立てしめ、且三人に命じ、緩急、慶喜の支族徳川慶頼を助けて静寛院宮を護衛せしむ
明治1年3月10日	初め徳川慶喜の大坂より江戸に帰るや、其臣属を会して、再挙を謀る。堀直虎「内蔵頭、須坂藩主〇旧幕府若年寄」諫めて之を止む、聴かれず、遂に自刃す。是に至り、須坂藩老臣、書を督府に上て、直虎死亡の情状を具陳し、之を朝廷に奏上せんことを請ふ。(東山道戦記)
明治1年3月11日	大総督府参謀西郷吉之助、江戸に入る。東海道官軍の前隊、亦至る
明治1年3月14日	是より先、徳川慶喜の臣山岡高歩、大総督府の旨を承けて還る。是日、勝義邦、参謀西郷隆盛の營「江戸高輪に在り」に就きて、慶喜謝罪の條款を陳し、且申請する所あり、隆盛、乃ち東海、東山二道の先鋒総督に謀し、仮に明日の進軍を止め、其書を携へて駿府に還る
明治1年3月19日	横浜裁判所を置き、兵庫裁判所総督東久世通禧を以て総督と為し、外国事務局権輔鍋島直大「初名茂実」を副総督と為す「二人参与、外国事務局輔並に故の如し」、尋て外国事務局判事井関盛良、寺島宗則等をして横浜に駐在せしむ
明治1年3月20日	大総督府参謀西郷吉之助、京都に至り、徳川慶喜処分の條款を奏す。朝議、其大綱を許し、慶喜の死一等を減ずるに決す。乃ち、旨を吉之助に授けて帰る報せしむ。「吉之助、二十一日京都を發す
明治1年3月25日	副総裁岩倉具視、議定、参与を会して、再び蝦夷開拓の事宜三条を策問す
明治1年4月2日	旧幕府、曩に米國に託して製造する所の装鉄艦「ストーンウォール・ジャクソン」横浜港に至る。海軍先鋒大原俊実「前侍従」、其品川海に入るを許さず
明治1年4月4日	四月四日、先鋒二督、輕装江戸城に入り、勅旨五条を田安慶頼に伝へ、十一日を期して舉行せしむ。勅旨五条(一曰、慶喜の死を減し、水戸に屏居す、二曰、江戸城を獻す、三曰、軍艦銃砲を獻す、四曰、城内居住の臣を屏(しりぞ)く、五曰、与謀の臣を罰す。)慶頼謹て命を奉し、慶喜に伝へて奉答せんことを請ふ、二督乃之を大総督及東山、北陸二道総督に報す。(東海道戦記)
明治1年4月5日	東海道先鋒総督府、徳川慶喜処分の事を麾下諸藩兵に布告し、仍ほ警備を厳にせしむ
明治1年4月5日	徳川慶喜、朝裁を受けしことを臣諫に論告して、朝旨を遵奉せしむ
明治1年4月7日	徳川慶喜の支族徳川慶頼、書を東海道先鋒総督府に上り、慶喜朝裁に服し、本月十日を以て水戸に屏居すべきこと及其臣諫をして勅命の条件を履行せしむべきことを稟す
明治1年4月7日	田安慶頼、書を先鋒総督に呈し、慶喜勅旨を奉し、十日水戸に赴くを申す。是夜、慶喜、其臣小野広平「内膳、旧幕府勘定奉行並」、滝川具知「播磨守、旧大目付」以下十人を罰す、尋て戸川安愛「伊豆守」、松平信敏「大隅守並に大目付」以下十一人の職を解く。(東海道戦記)
明治1年4月9日	会津藩士南摩八之丞「綱紀」・同佐久間平介、藩主松平容保の命を銜みて庄内藩に至り、同藩家老石原平右衛門・同松平権十郎等を会し、兩藩の攻守同盟に就て密議す。明日、更に権十郎・用人山口三郎兵衛・同菅秀三郎・国事掛和田助弥・同本多安之助等と會し、同盟の約を固む
明治1年4月11日	海軍先鋒大原俊実、旧幕府軍艦を収めんとす。旧幕府海軍副総裁榎本武揚「和泉守」風涛に託して其延期を請ひ、密に戦艦七艘を率いて館山湾「安房」に走る。明日、書を俊実に上り兵士を鎮撫して、曩に海陸軍士より請ふ所の裁命を待ことを稟す。旧幕府諸兵も亦前後逃走す。其下総に走る者、歩兵奉行大鳥圭介「純彰」を推して首領と為し、上総に走る者、撤兵頭福田八郎右衛門「道直」を推して魁首と為す。在府の会津・桑名二藩兵も亦下総に走りて旧幕兵に合す
明治1年4月11日	東海道先鋒総督橋本実梁、江戸城を収め、尾張藩をして之を守り、肥後藩に歩兵を統管せしむ
明治1年4月13日	田安家主徳川慶頼、書を海軍先鋒に上り、旧幕府軍艦逃走せしを以て、姑く納艦の延期を請ふ。東海道先鋒総督府、之を譴責して速に軍艦を納れしめ、明日、更に慶頼に命じ、旧幕府若年寄大久保忠寛「一翁」等に諭して速に朝命の条項を遂
明治1年4月16日	大鳥純彰「圭介、旧幕府歩兵奉行」、其党千六百許人と下総に走り、進て結城に逼る。内参謀祖式某「金八郎」、館林、結城、須坂三藩兵を武井駅「下総」に出して、之を邀ふ。克たす。適軍監平川某「和太郎」、彦根、笠間、壬生三藩兵を率て古河に赴かんとし、結城の急を聞き、転て之に赴き、賊と小山駅「下野」に戦ふ。利あらず。明日、結城の軍と合し、再び小山に戦ふ。軍監香川広安、彦根、宇都宮、岩村田三藩、及び岡田善長の兵を率て、宇都宮より来り援ふ。賊鋭を尽して抗拒す。官軍復た利あらず。広安等乃ち軍を宇都宮に収め、祖式某は古河
明治1年4月17日	東海道先鋒総督府、旧幕府脱走軍艦獻納の事を旧幕府若年寄大久保忠寛・同陸軍総裁勝義邦に委任す「十六日」義邦、乃ち連艦を追躡して海軍士等を曉諭す「同日」是日、脱艦悉く品川海に復帰す
明治1年4月17日	横浜裁判所総督東久世通禧「左近衛権中將」横浜港に至るを、大総督府に報す。(東海道戦記)

明治1年4月17日	賊徒、江戸以東の諸州郡に嘯聚するを以て、先鋒総督参謀加勢安場保和を以て、監軍と為し、津、大村二藩兵を率ゐ、往きて之を鎮撫せしむ、因て房総諸藩に令し、兵を發して之に應援せしむ、又檄を武、房、総、常諸藩、及び旧代官に伝へて、凶徒を緝捕せしむ。(東海道戦記)
明治1年4月19日	田安家主徳川慶頼書を東海道先鋒総督府に上り、旧幕府脱走軍艦品川海に復帰せしを以て、海軍士等をして艦中に謹慎し、旧幕府陸軍総裁勝義邦をして之を監せしめ、納艦の処分畢るを俟つて其若干隻を徳川氏に還付せんことを請ふ。是日、督府、慶頼の請を允し、軍艦四艘を納れしめ、其余四艘を以て徳川氏に賜ふ。「28日、海軍先鋒、軍艦四艘を収む
明治1年4月22日	大鳥純彰の徒、進て壬生に逼る、味爽内参謀河田景与、因幡、土佐、松本、壬生、吹上五藩、及び大久保忠告の兵を安塚駅に出して、之を邀ふ、賊勢頗る猖獗、官軍殆ど利あらず、適、景与、因幡藩後軍を率ゐて来り援け、奮撃して之を破る、賊壬生の虚を偵ひ、兵を分て来り襲ふ、守兵擊て之を却く、是日、参謀伊地知正治、進て結城に至り、壬生の急を開き薩摩、大垣二藩兵を分て赴援せしむ、二藩兵至れば則ち賊已に去る。(東山道戦記)
明治1年4月22日	古屋某「作左衛門」等、越後より進て信濃に入り、飯山「本多助成の治所」城下に逗留、飯山、松代二藩、其状を督府に報す、督府乃ち信濃諸藩に令して、之を掃蕩せしむ、因て松代藩兵の甲府に至る者を罷帰す、又尾張藩に令して、中野関門を嚴守し、賊徒を緝捕せしむ。(東山道戦記)
明治1年4月22日	松平正親「太郎、旧幕府陸軍奉行」、往て下野の賊を鎮撫せんことを、大総督府に請ふ、之を聴す、是日、先鋒総督、書を軍監安場保和「時に出て下野に在り」、及び東山、北陸二道の総督に致して、出征の諸兵に告げしむ、正親切に金を賚し、賊魁大鳥純彰に遣る。(東海道戦記)
明治1年4月24日	大総督府に令して、旧幕府の凶籍を収め、且旧幕府の使用せし造艦製鉄等の諸工及分析術等に通曉する者を京都に致さし
明治1年4月25日	横浜在住米国人ヴァン・リード「自ら布哇国総領事と称す」我國民を備ひ之を布哇島に送らんとし、査証を神奈川裁判所に請ふ「四月十七日」布哇は未締盟国なるを以て許さず。往復數回、議未だ諧はず。是日、ヴァン・リード、邦人百二十許人を英國船に搭せて横浜を出帆せしむ
明治1年4月25日	是より先、急幕府歩兵頭古屋佐久左衛門「智珍」等、越後より飯山「信濃」城下に侵入す。飯山藩、援を旁近諸藩に請ふ。是日、名古屋・松代等諸藩兵、赴援し、賊兵を邀撃して之を走らす。明日、高田藩兵、亦川浦村「越後國中頸城郡」
明治1年4月25日	二十五日、勅して徳川慶喜の処分、及び其継嗣、秩祿の議を、親王、三職、公卿、諸侯、貢士に下す、議定幟に親王、蜂須賀茂韶以下、各意見を上陳す、既にして大総督熾仁親王も亦使を遣して、速に徳川氏の処分を定めんことを請ひ、并せて諸道総督の意見書を上る
明治1年4月25日	督府、松平容保の罪一等を宥め、命して罪を謝し、降を乞はしむ、尋て容保上書して、徳川氏の処分未だ定らざるを以て、其命に應ずること能はざるを申す。(奥羽戦記)
明治1年4月29日	大鳥純彰等、日光山を去り、東照宮の神主を奉して、会津に入る
明治1年4月5日	神奈川裁判所、英・仏・米・蘭・普・葡・瑞・白・伊・丁各国領事に牒し、外国商人の兵仗を私売するを禁ず。尋で「二十二日」夜陰竊に銃器を埠頭に搬送するものあるを以て、再び牒して之を戒飭せしむ
明治1年4月5日	是より先、古屋某「作左衛門」等高田に至る、榊原政敬、之を其封内に居く、既にして某等、飯山に入り、尾張、松代等諸藩兵と戦ひ、敗れ還る、是に於て政敬、藩兵を發し、某等を川浦村に要撃して之を敗る、是日、書を督府に上て、其状を申す、督府、詰るに賊徒を封内に納るるの亡状を以てす、政敬、答弁書を上る。(北陸道戦記)
明治1年4月6日	参与木戸孝允を長崎に遣して、天主教徒を処分す、尋て予め加賀薩摩以下の三十四藩に命して、之を保管せしむ、孝允、長崎に抵り、裁判所総督沢宣嘉と謀り、先其魁首百余人を逮捕し、之を長門、福山、津和野三藩に分付す
明治1年4月6日	旧幕府勘定奉行小栗忠順「上野介」其采邑榎田村「上野国群馬郡」に拠りて守備を修むるの報あり。東海道先鋒総督府乃ち監察原保太郎「丹波の人」・高知藩士豊永貫一郎を監軍と為し、高崎・安中・吉井三藩兵を督し、往いて之を逮捕せしむ「4月22日」。是日、保太郎等、忠順父子及其臣隸「6人」を捕へて之を斬る
明治1年4月8日	林忠崇、遊撃隊と勝山「酒井忠美の治所」、館山「稲葉正善の治所」二藩を劫掠す、勝山藩其状を先鋒総督府に申し、軍を進めて之を討せんと請ふ、尋て忠崇等、海に航して相模に走る。(東海道戦記)
明治1年4月8日	横浜裁判所総督東久世通禧、米国公使ファン・ファルケンブルグと会して、装鉄艦交収のことを議す。公使、肯ぜず
明治1年4月11日	外国事務局権判事陸奥陽之助「宗光・和歌山藩士」に命じて、装鉄艦交収費調達の事を掌らしむ。因て会計事務局兼勤を命ず。尋で「十九日」萩藩に命じて同艦を交収保管せしむ
明治1年4月16日	徳川氏の軍艦開陽艦賊徒、鎮撫と称して館山港「安房国安房郡に在り」に入る、津の隊長、令して其上陸を禁ず。「館山藩届書」(房総戦記)
明治1年4月16日	田安慶頼、書を大総督府に上りて、旧幕府雇ふ所の英国海軍教師の措置を稟請す、是日、督府、神奈川裁判所に牒して、教師を罷帰せしむ。(東海道戦記)
明治1年4月16日	旧幕府脱走兵、八王子駅「武蔵国南多摩郡」に屯し、將に進んで甲府に逼らんとす。甲府城代水野忠敬「出羽守・沼津藩主」乃ち中津・沼津・掛川三藩兵を白野駅「甲斐国北都留郡」に出して之に備へ、松代藩に命じて甲府に來援せしむ
明治1年4月17日	新潟開港の期、三月九日に在り、果さず、各国公使、神奈川裁判所に就き、五月十二日を以て開港の期と為さんことを請ふ、裁判所乃ち書を大総督府に致して、其事を咨稟す、総督答書して、太政官に申稟せしむ。(東海道戦記)
明治1年4月18日	大鳥純彰等会津に入り、会津兵と相議して、再び兵を三斗小屋、白河、日光三道に出す、純彰躬から日光口の軍を督し、進て藤原村に拠り、兵を分て傍近を占略す、是日、土佐藩兵之を大桑村に破る。(東山道戦記)
明治1年4月23日	神奈川裁判所総督東久世通禧、英・仏・米・蘭・普・伊各国使臣に牒し、徳川慶喜既に伏罪せるを以て、局外中立の解除を求む。尋で「二十五日」使臣等、書を復して其証左を得て商議せんことを請ふ
明治1年4月24日	箱館裁判所を箱館府と改め(政体書体制により)、総督清水谷公考「侍従」を以て知事と為し、副総督土井利恒「能登守・大野藩主」を罷め、和歌山藩士松浦武四郎「弘」を徴士箱館府判事に、徴士参与兼内国事務局判事井上石見を同府判事に、内国事務局権判事岡本監輔・同山東一郎・同小野淳輔・同堀真五郎・同宇野監物を同府権判事と為す。尋で、利恒、疾を以て暇を請ひ、藩に帰る。
明治1年4月26日	箱館府知事清水谷公考、箱館に至り、旧幕府奉行所の金穀簿書を収む。尋で、聴を五稜郭に開き(5月1日)、市民を安撫す。又大政復古を報ずるの国書を箱館駐在の露国領事エビュツオフに交付す
明治1年4月29日	二十九日、特旨、田安家達を以て、宗家徳川氏の後を承かしむ。(東海道戦記)
明治1年5月1日	田安家主徳川慶頼、書を大総督府に上り、徳川家達「亀之助」幼弱なるを以て、前津山藩主松平齐民「雅堂」をして之を輔けしめんことを請ふ。明日、之を聴す。尋で「九日」慶頼、又齐民の静寛院宮「親子内親王・故征夷大将軍徳川家茂夫人」等守衛を罷め、前吉井藩主吉井信発「左兵衛督」をして之に代らしめんことを請ふ
明治1年5月2日	神奈川裁判所副総督鍋島直大「肥前守・佐賀藩主」英・米・蘭・独・伊五国公使に、徳川慶喜の恭順書写を送致し、速に局外中立を解除せんことを求む
明治1年5月3日	東本願寺門主光勝「嚴如・前大僧正」金六千両を献ず
明治1年5月3日	是日、仙台藩老臣坂英力「時秀」・同但木土佐「成行」・米沢藩老臣竹俣美作「久綱」・盛岡藩老臣野野村真澄「雅言」・久保田藩老臣戸村十太夫「義効」・弘前藩老臣山中兵部「泰靖」・二本松藩老臣丹羽一学「富穀」・守山藩老臣岡田彦左衛門「宜忠」・新庄藩老臣舟生源右衛門「成定」・八戸藩老臣吉岡左膳「政喜」・棚倉藩老臣梅村角兵衛「次立」・中村藩老臣相馬鞆負「胤就」・三春藩老臣秋田帯刀「忠恒」・山形藩老臣水野三郎右衛門「元宣」・岩城平藩老臣三田八弥「宜隆」・松前藩老臣下国弾正「季定」・福島藩老臣池田権左衛門「邦知」・本庄藩老
明治1年5月3日	仙台藩・米沢藩・盛岡藩・久保田藩・弘前藩・二本松藩・守山藩・新庄藩・八戸藩・棚倉藩・中村藩・三春藩・山形藩・岩城平藩・松前藩・福島藩・本庄藩・泉藩・亀田藩・湯長谷藩・下手度藩・一ノ関藩・上ノ山藩・天童藩・長瀬の25藩は、仙台に会盟し、會議所を仙台に、軍事局を福島に置き、同盟する。次いで会津・庄内・新発田・長岡・村上・村松・三根山・黒川の諸藩も同盟に加はる
明治1年5月6日	大総督府、徳川家達に命じて、江戸府内旧幕府の制札を撤せしむ

明治1年5月9日	九日、丁銀、豆板銀の通行を止め、新貨を鑄造して之を交換するを布告す、尋て令して、先之を官に納めしめ、其紙幣に換へんと請ふ者は之を許す
明治1年5月14日	神奈川在住米国人ヴァン・リード「布哇国総領事」布哇国と和親条約の締結を求む。是日、外国官、之を拒否し、其国民の通商に従事することを許す
明治1年5月15日	江戸に在る官軍、路を分けて東叡山の賊徒彰義隊を攻む。東海道先鋒総督兼鎮撫使橋本実梁「左近衛権中将」諸軍を督す。賊兵、拒ぎ戦ふ。官軍、火を梵字に縦て之に乗ず。賊兵、遂に敗散す。輪王寺門主入道公現親王、服を変じ、潜出し
明治1年5月15日	彰義隊の横暴日に益甚く、官兵を途に殺すに至る、是に於て大総督府、諸軍に令して之を討す、賊徒大に敗る、輪王寺執当覚王院義寛等、入道公現親王を要して逃匿せしむ、親王遂に会津に入る
明治1年5月16日	五月十五日、味爽、諸軍西城の下に会し、分道進討、一は東叡山の前門に向ひ、一は其後門に赴く、賊兵各処出拒ぎ、殺傷相当る、午後、前門戦方に耐なり、官軍乃ち兵を遶らして、其東麓に出て、賊陣を横射し、本道銃砲並駆り、呐喊薄撃す、賊勢漸沮む、遂に前門を抜き、火を梵字に縦て之に乗す、時に後門の軍亦至る、賊風を望て潰散し、器仗遺棄、僵屍路に填す、申牌、全軍凱を奏す。(東叡山戦記)
明治1年5月16日	新製の紙幣「拾両・五両・壹両・壹分・壹朱の五朱」を発行す。『維新史料綱要』9 新製の紙幣を発行す。「復古記」5巻 194頁
明治1年5月19日	奈良県を置き、久我家家士春日仲義「讃岐守」を以て知事と為し、又笠松県知事田内源助「盛徳・福井藩士」を罷め、福井藩士長谷部基平「怒連」を以て之に代ふ
明治1年5月19日	増上寺「江戸芝」の僧徒等、彰義隊等の戦死者の遺骸を收容埋葬せんことを大総督府に請ふ。之を聴す
明治1年5月20日	神奈川裁判所総督東久世通禧、書を各国公使に遣り、江戸の賊徒を掃蕩せしを報す
明治1年5月24日	徳川家達を駿河に封じ、遠江、陸奥の地を併せて、七拾万石を賜ふ、尋て参河を以て陸奥に代ふ、又一橋茂栄、田安慶頼を藩屏に列し、徳川氏臣隸の官位を停む。(東海道戦記)
明治1年6月2日	大総督府、諸藩の戦死者を江戸城に祭る
明治1年6月3日	外国官、各国領事に牒して、新発行の紙幣「金札」は、之を金・銀貨に兌換するを許さざることを通告す
明治1年6月5日	英、米二国商船、密に新潟港に赴き、賊と貿易する者あるを以て、越後口参謀黒田清隆「了介、薩摩藩士」、書を大総督府に致し、二国公使に令して、之を禁遏せしめんと請ふ。(東海道戦記)
明治1年6月6日	神奈川裁判所総督東久世通禧「左近衛権中将」各国公使に牒して、一分銀・洋銀交換率を定め「一分銀二百九十三枚対メキシコ弗百枚」需に応じて改鑄引換ふべき旨を告示す
明治1年6月6日	大総督府、令して賊徒追討の際、火を放つて民舎を焼くを厳禁す
明治1年6月7日	鎮台府、徳川家達に令して、旧幕府の文書記録を上らしむ
明治1年6月8日	官許を得ずして新聞紙類を刊行するを申禁す
明治1年6月13日	軍費不足するを以て、令して、賊徒平定に至る迄、五等官以上の月俸を減額す
明治1年6月14日	明治元年「戊辰」六月十四日、軍務官知事嘉彰親王「仁和寺宮」を拜して、会津征討越後口総督と為し「知事故の如し」、三等陸軍将西園寺公望「権中納言〇時に越後高田に在り」、壬生基修「左衛門権佐」を参謀と為し「二人、軍將故の如し」、楠田英世「十左衛門、肥前藩士」を副参謀と為し、土倉正彦「修理介」、荒尾成章「駿河、二人並に因幡藩士」、松平正直「源太郎、越前藩士」を軍監と為す、軍務官判事吉井督春「幸輔、薩摩藩士」、小軍監三宮義胤「耕庵、近江人」、宮川長春「助五郎」、小監察片岡利和「源馬、二人並に旧土佐藩士」、芳野親義「
明治1年6月14日	開港地所在の府・県「大坂・神奈川・長崎・箱館」に令して外国事務を兼管せしむ。『維新史料綱要』9巻 145頁
明治1年6月22日	徳川家達、書を鎮台府に上り、其臣隸の存録し難き者は、皆土籍を除き、農商に帰し、若くは浪人と称し、以て生計を為さしめんと請ふ、是日、其農商に帰するを聴す、家達、又、之を蝦夷に移して、開拓の業に服せしめんと請ふ、聴さす。
明治1年6月29日	是より先、旧幕府の汽船長崎丸、品川を脱し、仙台沿海に出没して賊徒に通ず。是日、大総督府、駿河府中藩主徳川家達に令して之を収めしむ
明治1年7月2日	是より先、入道公現親王「輪王寺宮」江戸を去りて会津に奔る、是に至り仙台に赴き、伊達慶邦、上杉齊憲に令し、奥、羽、越諸藩を督して、薩摩藩兵を撃たしむ、諸藩乃ち相謀り、親王を推して軍事総督と為し、公議府を白石に設く、板倉勝静「伊賀〇旧備中松山藩主、旧幕府老中、時に姓名を変して徳山四郎左衛門、又安井八郎と称す」、小笠原長行「老岐〇唐津藩主長国の子、旧幕府老中、時に山中静翁、又三好寛介、津巻魯輔と称す」、阿部正備「葆真と号す〇棚倉藩主正静の高祖父」等も亦来会す、諸藩又書を横浜駐劄各国公使領事に贈りて、聯合の事を告
明治1年7月10日	仏国人モンブラン、書を外国官に致し、速に局外中立を撤廃せんことを懇請す
明治1年7月10日	旧幕府麾下の朝臣に列せし者を侮慢脅迫して其帰順を障害する者あり。是日、江戸鎮台府、駿河府中藩主徳川家達に令して、厳に之を戒飭せしむ
明治1年7月12日	輪王寺門主入道公現親王、仙台を発し、明日、白石に至る。仙台・米沢等諸藩、親王を推して軍事総督と為し、公議府を白石に設く。又、奥羽越列藩軍務総督兼朝負「盛景・仙台藩士」・色部長門「久長・米沢藩士」・梶原平馬「景賢・会津藩士」・石原倉右衛門「成知・庄内藩士」・河井継之助「秋義・長岡藩士」連署して、書を各国公使に遣り、同盟の趣大坂を以て開港場と為す
明治1年7月16日	久保田藩、箱根に於て米国汽船「カガノカミ・後陽春艦」を購入す「七日」是日、同船、土埼港に至る
明治1年7月17日	詔して江戸を以て東京と為し、鎮台(5月19日に江戸鎮台設置)および関八州鎮將(5月24日に輔相三条実美が関八州鎮將となる)を廃して鎮將府を置き、駿河以東十三国を管せしむ。乃ち輔相三条実美「右大臣・左近衛権大将」をして鎮將を兼ねしめ、大総督は専ら軍務を掌らしむ。又江戸府を改めて東京府と称し、鎮台輔烏丸光徳「参議」を以て知事と為す。尋で「八月」十三国の社寺を府・藩・県に属し、社寺裁判所を廃す。
明治1年7月21日	会津征討越後口総督府、山口藩士山田市尾之允「顕義」・鹿児島藩士本田弥右衛門「親雄」を海軍参謀と為し、陸軍参謀を兼ねしめ、高知藩士岩村精一郎「高俊」を軍監と為し、徴兵「五番隊十二番隊」及鹿児島・広島・山口・明石・福知山・高鍋六藩兵を督して、海路、新発田に赴かしむ
明治1年7月是月	是より先、旧幕府、米国より購買する所の軍艦、横浜港に到る、神奈川裁判所、将さに之を交収せんとす、米国公使、固く局外中立を執て、肯せず、是に至り、仙台、会津、米沢、庄内人等、新潟に会して、本艦を交収せんことを謀り、又新潟港を開きて、互市場と為し、板倉勝静「伊賀、旧備中松山藩主、時に陸奥に在り、姓名を変して徳山四郎左衛門と称す」陸奥より迎へて、以て其事を管せしめんとす、新潟、敗るゝに及て、其事遂に寝む。(越後口戦記)
明治1年8月7日	北越の賊未だ平定せざるを以て、長門、因幡、備前、津四藩に令し、藩兵一大隊を予備して、不時の徴発に應せしむ
明治1年8月12日	盛岡藩兵の箱館を成る者、本藩の急を聞き、自ら其營を焼いて盛岡に還る『維新史料綱要』9巻 326頁
明治1年8月14日	是より先、朝廷、南部利剛に命し、兵を發して箱館を警守せしむ「四月十四日に在り」、是に至り藩兵の箱館に在る者、本藩の急を聞き、其營を火きて、盛岡に撤帰す、是日、総督府に到る。(奥羽戦記)
明治1年8月18日	南部利剛、使を弘前藩に遣して、奥羽の同盟に背くを詰る、弘前藩之を却く、適、秋田藩十二所口の急を報し、援を乞ふ、弘前藩乃ち兵「一小隊」を發して赴き援ふ、是日、二藩兵、賊兵を大滝、軽井沢等諸村に破り、追撃して十二所駅に至る、既にして扇田村に退守す、時に雪沢口の賊、大館駅に逼るの報到る、弘前藩兵乃ち転じて大館に赴く。(奥羽戦記)
明治1年8月19日	旧幕府麾下士榎本登次郎「武揚」等、密に蝦夷地に拠りて徳川氏の業を復せんことを図り、仙台藩主伊達慶邦・会津藩主松平容保等と密に謀を通ず。是日、品川海上の徳川氏の軍艦八艘を奪ひて北上す

榎本釜次郎以下が品川沖を脱走してから降伏までの迄の概要説明資料（「蝦夷戦記」より）

明治1年10月19日	明治元年十月十九日、是より先、榎本武揚「和泉〇旧幕府海軍副総裁」、徳川氏の諸艦を督して品川海に在り、密に蝦夷地に拠りて、徳川氏の業を復せんことを図り、松平正親「太郎〇旧幕府陸軍奉行」等と、船艦八隻を奪ふて、仙台海に走る、伊達慶邦「陸奥〇仙台藩主」の帰順するに及て、平瀨口総督府、慶邦に命じて武揚等を招降せしむ、従はず、松平定敬「越中〇旧桑名藩主」、板倉勝静「伊賀〇旧備前中山藩主」、其子勝全「万之助」、小笠原長行「宍道〇唐津藩主長国の子」及び竹中重固「丹後〇旧幕府陸軍奉行」、大鳥純彰「圭介〇旧幕府歩兵奉行」以下の諸敗兵、会津より来り、仙台、会津遺賢の徒と、武揚等の艦に投ず、是に至り、武揚等二千五百許人、開陽、回天、蟠龍、神速、長鯨、大江、鳳凰七艦に駕して蝦夷に向ふ、報箱館府「時に五稜郭を以て府庁と為す」に達す、時に箱館の守備府兵、及び松前藩成兵数百人に過ぎず、知事清水谷公考「侍従」乃ち使を弘前藩に遣して、援兵を召す、是日、弘前藩兵「四小隊」至る、公考命じて谷地頭、及び尻沢辺を警守せしむ。（蝦夷戦記）
明治1年10月20日	榎本武揚等、南蝦夷鷺木「箱館を距る十二里三町」に入り、兵を分て五稜郭、及び箱館に向ふ、知事清水谷公考、府兵及び弘前、松前二藩兵を出して之を拒く、適、奥羽鎮撫総督府、福山「六百九十六人」、大野「百七十一人」二藩兵を發して来り援ふ、公考乃ち其兵を分て、弁天崎、尻沢辺、谷地頭等、諸処を警守せしむ。（蝦夷戦記）
明治1年10月20日	榎本釜次郎は、Les Keraïs exilés de Toukugawaの肩書で箱館在留各国領事へ趣意書を提出する（「イギリス外務省文書“日本通信”」）
明治1年10月21日	松前藩、箱館の警を聞き、兵「五十人」を發して来り援ふ、知事清水谷公考命じて、有川村を守らしむ。（蝦夷戦記）
明治1年10月22日	賊兵、進て峠下村に至る、是夜、府兵及び弘前、松前二藩兵、路を分て賊營を撃つ、賊兵拒き戦ふ、官軍利あらず、城山郷及び七重村に退守す。（蝦夷戦記）
明治1年10月23日	賊兵、城山郷を襲ふ、官軍利あらず、大川村に退守す、七重村の軍も亦、退て大川の軍に合す、知事清水谷公考、乃ち福山、大野二藩兵を大野村に遣して、之に応援せしめ、権判事堀義彦「真五郎〇長門藩士」をして、七重口の軍を監し、福山藩隊長岡田某「伊右衛門」をして大野口の軍を監し、両道並進て賊を討せしむ。（蝦夷戦記）
明治1年10月24日	知事清水谷公考、書を津軽承昭「越中守〇弘前藩主」に贈りて、官軍寡單、賊を支へ難きを報し、更に援兵を召す。（蝦夷戦記）
明治1年10月24日	官軍、將に七重、大野両路より進剿せんとす、乃ち部署を定め、府兵及び福山、弘前二藩兵は、七重口に向ひ、福山、弘前、大野、松前四藩兵は、大野口に向ふ、早旦、大野口の軍將に發せんとす、賊兵来り侵すに會す、大に村中に戦ふ、官軍利あらず、五稜郭及び箱館に退守す、七重口の軍、分道進討、賊と七重村に戦ふ、賊却き走る、官軍之に乗す、既にして賊兵返闘し、其鋒甚鋭し、官軍為に破れ、退て五稜郭を保す。（蝦夷戦記）
明治1年10月25日	官軍、連戦利あらず、賊、進て五稜郭に逼る、知事清水谷公考、海に航して青森「陸奥津軽郡」に走る、府兵及び福山、弘前以下四藩兵、之に従ふ、賊、遂に五稜郭、及び箱館を取る。（蝦夷戦記）
明治1年10月26日	知事清水谷公考、権判事堀義彦を東京に遣して、箱館快復の策を陳し、軍艦、及び精兵を發遣せんことを請ふ。（蝦夷戦記）
明治1年10月27日	松前藩第二軍「二小隊」、一渡村に至る、箱館の官軍、青森に走ると聞き、退て福島村に次す。（蝦夷戦記）
明治1年10月27日	秋田藩の汽船「高尾号」、將に兵庫港に航せんとし、箱館港に入る、賊之を奪ひ船客二人を幽す。「後二人を放還す。」（蝦夷戦記）
明治1年10月28日	賊既に五稜郭、及び箱館を略取し、又兵を分て松前に向ふ、松前徳広「志摩守〇松前藩主、食封三万石」、福山城を去て、館村の新砦「福山城を距る三十余里」に居り、書を津軽承昭に贈りて、救援を乞ふ。（蝦夷戦記）
明治1年10月30日	箱館の警報、東京に達す、乃ち津「二百四十七人」、備前「五百六十六人」、筑後「二百二十一人」三藩兵を箱館に發遣し、八戸藩をして、糧餉を弁給せしむ。（蝦夷戦記）
明治1年10月是月	是月、野田豁通「大造〇肥後藩士、時に箱館府に出仕し、青森に在り」を以て、軍事參謀試補と為す。（蝦夷戦記）
明治1年11月1日	賊艦一隻「蟠龍艦」福山港に入り、福山城を砲撃す、松前藩兵、砲墩に拠りて拒戦す、賊艦、少く毀損す、遂に白神洋に走り、転て福島村を侵す、藩兵又撃て之を却く、陸地の賊、亦進て知内村に至る、是夜、藩兵の福島に在る者、間道より進て、知内の賊營を斫る、賊兵潰え走る。（蝦夷戦記）
明治1年11月1日	知事清水谷公考、移て浪岡駅「陸奥津軽郡」に居り、諸藩兵を分て、青森、及高田、油川、新城等諸村を守らしむ、弘前藩も亦兵を封内海岸に置きて、賊兵に備ふ、尋て公考、黒石「津軽承叙の治所」に移る。（蝦夷戦記）
明治1年11月2日	松前藩兵、砲墩を一渡村に築き、兵を分て之を守る、是日、賊兵来り襲ふ、藩兵利あらず、退て賊を山崎、福島二村に拒み、苦戦時を移す、遂に支ふる能はず、福島嶺に退守す。（蝦夷戦記）
明治1年11月3日	知事清水谷公考、松前の急を聞き、松前藩兵の青森に在る者を罷掃して、賊を拒かしむ。（蝦夷戦記）
明治1年11月4日	秋田藩兵「三小隊」を發して、知事清水谷公考を警守せしむ、公考命じて、封内沿海の地に備へしむ。（蝦夷戦記）
明治1年11月5日	賊兵、路を分て福山城に逼る、松前藩兵、出て松ヶ崎、及び野越坂に邀ふ、利あらず、退て城内に嬰守す、賊、直に進て城に伝く、藩兵、遂に支ふる能はず、老臣崎崎広備「民部」、城を火きて、衆と俱に江刺に走る、賊遂に松前を取る。（蝦夷戦記）
明治1年11月5日	徳川家達「龜之助」に命じて、箱館の賊を討せしむ、尋て家達、及び松平斉民「越後守、確堂と号す〇津山藩主、慶倫の父、時に家達の後見たり」、一橋茂榮「大納言」、田安慶頼「中納言」連署して、家達幼弱なるを以て、箱館征討を他藩に命し、家達をして其軍に附從せしめんことを請ふ、批して後命を待たしむ。（蝦夷戦記）
明治1年11月7日	海陸軍參謀山田頭義「市之允〇長門藩士、時に出羽秋田に在り」に命じて、箱館の賊を討せしむ、是日、頭義、長門「七百八十一人」、徳山「三百人」二藩兵を率いて、青森に至る、時に北地严寒、攻戦に便ならず、因て軍を青森に駐め、明春を俟て進剿す。（蝦夷戦記）
明治1年11月7日	賊艦二隻「回天、蟠龍二艦」、青森港に入り、弘前藩に就て、書を奥羽越列藩に贈り、逃亡の情由を陳訴し、救援を乞ふ、既にして箱館に走る。（蝦夷戦記）
明治1年11月9日	海陸軍參謀山田頭義を以て、青森口陸軍參謀と為す、因て青森口出征諸藩兵に令して、其節度を受けしむ。（蝦夷戦記）
明治1年11月10日	長門「五百人」、及び津藩兵「八百二十八人」の仙台に在る者を秋田に遣して、箱館の賊に備へ、藤堂広立「豊前〇津藩士」を以て軍監と為し、津藩兵を督せしめ、秋田藩兵をして、長門藩兵の糧餉を弁給せしむ。（蝦夷戦記）
明治1年11月11日	賊既に松前を取り、兵を分て江刺に向ふ、五稜郭の賊亦、兵を分て二股口を進む。（蝦夷戦記）
明治1年11月12日	會計官権判事林友幸「半七〇長門藩士」を以て、軍監を兼ねしめ、南部及び青森に差遣す。（蝦夷戦記）
明治1年11月12日	是より先、榎本武揚の仙台海に在るや、軍艦二隻「千代田形、長崎二艦」を酒田港に遣りて、莊内を援ふ、既にして一隻「長崎」、風濤の為に毀壞す、是日、一隻「千代田形」箱館港に至る。（蝦夷戦記）
明治1年11月13日	松前徳広、館村の新砦を去て、江刺に移り、兵を分て新砦、及び稲倉石の関門を守る、是日、二股口の賊、来て関門を攻む、藩兵利あらず、退て新砦の軍に合す。（蝦夷戦記）
明治1年11月14日	二股口の賊、進て鶴村に拠る、松前藩兵、路を分て之を掩撃す、賊兵潰え走る、既にして賊の別隊、遶りて後路を断んとす、乃ち兵を取て館村の新砦に退く、賊又新砦に逼る、藩兵撃て之を却く、是より先、藩兵分て大滝の嶮を守る、是日、松前口の賊来り攻む、藩兵利あらず、石崎村に退守す。（蝦夷戦記）
明治1年11月14日	軍事參謀試補野田豁通を以て、軍監を兼ねしむ、尋て其請を聴し、參謀試補を罷む。（蝦夷戦記）
明治1年11月15日	二股口の賊、再び館村の新砦を攻む、松前藩兵拒戦利あらず、砦を棄て笹山に走る、松前口の賊亦、進て江刺に逼る、松前徳広、熊石に遁る、是日、賊艦一隻「開陽艦」江刺港に入り、暗礁に触れて摧破す、是より先、徳広、使を青森に遣して、急を報し援を乞ふ、陸軍參謀山田頭義、將に兵を發して之を援んとす、是に至り、江刺陥るを以て遂に果さす。（蝦夷戦記）
明治1年11月15日	松前徳広の弟隆広「敦千代」京師に在り、賊兵、松前地方を陥ると聞き、書を朝に上り、藩兵の東京に在る者と俱に掃討して、賊徒を討せんことを請ふ、之を聴し、命じて速に勤賊の功を奏せしむ、隆広乃ち京を發し、青森に赴く。（蝦夷戦記）
明治1年11月19日	令して箱館の賊を討す。（蝦夷戦記）
明治1年11月19日	賊兵、進て熊石に逼る、松前徳広海に航して、平館「陸奥津軽郡」に走る、其臣隷五百許人は、賊に降る、是に於て、箱館地方悉く賊に陥る。（蝦夷戦記）

明治1年11月22日	賊艦一隻「神速艦」、又江刺港に壊る。(蝦夷戦記)
明治1年11月24日	松平齊民、書を上り、徳川慶喜をして、家達に代り、箱館の賊を討せしめんことを請ふ、聴さず、徳川昭武「民部大輔○水戸藩主、慶篤の養子」に命じて、之に代らしむ。(蝦夷戦記)
明治1年11月25日	松前徳広、平館より弘前に移り、寺院に謹慎し、書を朝に上りて罪を待つ、批して問はず。「尋て徳広、病て弘前に没す、子兼広封を襲く。」(蝦夷戦記)
明治1年11月25日	備前藩兵、野辺地駅「陸奥北郡」に至る、陸軍参謀山田顕義、命じて本地を警守せしむ。(蝦夷戦記)
明治1年11月27日	箱館府知事清水谷公考を以て、青森口総督を兼しむ、因て徳川昭武に命じて、公考の節度に従はしむ。(蝦夷戦記)
明治1年11月27日	津、筑後二藩兵、青森に至る。「藤堂高潔家記、有馬頼成家記」(蝦夷戦記)
明治1年11月28日	賊兵来襲の虞あるを以て、陸軍参謀山田顕義、青森口の諸軍を戒飭して、其守備を厳にせしむ、又出征諸藩に令して、兵隊及び銃器の員数を録申せしむ。(蝦夷戦記)
明治1年12月10日	総督、黒石より牙宮を青森に移し、明日、諸軍に令して、総督の任を受けしを告ぐ、尋て諸藩会議所を営中に設く。(蝦夷戦記)
明治1年12月11日	督府、軍務官判事試補大田黒惟信「亥和太○肥後藩士、時に箱館府に出仕し、青森に在り」を以て、参謀と為し、岸良直養「彦七○薩摩藩士」、駒井忠仲「政五郎○長門藩士」、松本鼎「鼎造」、岩淵某「彦吉」、山岡某「源左衛門○以上三人、並に族籍未詳」、和田某「慎之介○因幡藩士」を監軍と為す、又軍中役夫、及び弾薬の制限を定む。(蝦夷戦記)
明治1年12月14日	是より先、榎本武揚等、英、仏両公使に因りて書を上り、徳川氏の胤子一人を奉して、蝦夷地を開拓せんことを請ふ、是日、議定兼輔相岩倉具視「右兵衛督」、両公使に移書して、之を却く。(蝦夷戦記)
明治1年12月14日	松前徳広、拒戦の功を賞して、直垂一領、金三千兩を賜ひ、官軍の進撃を待ちて、俱に勳蕩の功を奏せしむ。「時に、徳広病没の報未だ到らず。」(蝦夷戦記)
明治1年12月15日	賊、既に蝦夷地を略取す、是日、祝砲を發し、全島平定を賀す、又総裁以下諸司を置き、榎本武揚を総裁に、松平正親を副総裁に、荒井某「郁之助」を海軍奉行に、大鳥純彰を陸軍奉行に、永井尚志「玄蕃」、中島某「三郎介」を箱館奉行に、人見寧「勝太郎」を松前奉行に、松岡某「四郎次郎」、小杉某「政之進」を江刺奉行に、沢貞説「太郎左衛門」を開拓奉行に撰任し、二百余人を室蘭に移して、拓地の業に就かしめ、五稜郭を以て牙宮と為し、戍兵を各地に置きて、不虞に備ふ、仏人十人、亦賊中に在りて軍事に参す。(蝦夷戦記)
明治1年12月20日	金三千兩を頒賜して、青森口の諸軍を犒ふ。(蝦夷戦記)
明治1年12月28日	米・英・仏・蘭・独・伊六ヶ国公使、局外中立解除を宣言す
明治1年12月28日	賊徒、未だ載定(かんでい)に就かざるを以て、督府、諸軍に令して、仮に歳尾年首の礼を停む。(蝦夷戦記)
明治1年12月28日	賊兵、大に戦備を修め、將に青森を進撃せんとするの報到る、督府、乃ち諸軍を戒めて、不虞に備ふ。(蝦夷戦記)
明治1年12月30日	徳川昭武の箱館出征を停む、尋て其請を聴し、兵「二百人」を箱館に出さしむ。(蝦夷戦記)
明治2年1月25日	総督、大に兵を青森「石神原」に關す。(蝦夷戦記)
明治2年1月25日	松前兼広「勝千代、後修広と改む○松前藩主、時に弘前に在り」、書を朝に上りて、城邑、賊兵の侵略する所と為り、圍藩疲弊の状を陳し、金五万兩を借んことを請ふ、是日、金三万兩を貸与す。(蝦夷戦記)
明治2年1月25日	箱館府兵を解く。(蝦夷戦記)
明治2年1月是月	是月、榎本武揚、官軍の傷者、及び松前藩の降人を内地に送致す。(蝦夷戦記)
明治2年2月15日	松前兼広、再び書を朝に上りて、邑民賊兵の劫掠する所と為り、飢餓に瀕するの状を陳し、速に大師を發して、松前地方を載定せんことを請ふ。(蝦夷戦記)
明治2年2月23日	薩摩藩に命じて、兵「二百九十三人」を青森に出さしむ。(蝦夷戦記)
明治2年2月25日	將に蝦夷地を回復せんとするを以て、松前兼広に小銃二百口を賜ふ。(蝦夷戦記)
明治2年2月25日	廷議、將に海軍を發して、陸軍に應援し、蝦夷地の賊を討せんとなす、乃ち軍務官判事増田明道「虎之助○肥前藩士」を以て海軍参謀と為し、判事試補石井露吉「富之助○肥前藩士」を参謀補助と為し、甲鉄「艦長中島四郎」、陽春「艦長石井貞之進」、春日「薩摩藩艦、艦長赤塚源六」、丁卯「長門藩艦、艦長山田久太郎○以上四隻軍艦」、飛竜「艦長岡敏三郎」、豊安「安芸藩艦、艦長入江良之進」、戊辰「阿波藩艦、艦長小山辰彦」、晨風「筑後藩艦、艦長西田元三郎○以上四隻運輸船」八艦を率いて、青森に赴かしむ。(蝦夷戦記)
明治2年2月27日	板倉勝全、箱館より東京に至り、戸田忠友「土佐守○宇都宮藩主」に就き、自首して罪を乞ふ、命じて忠友の邸に幽す。(蝦夷戦記)
明治2年2月30日	黒田清隆「了介○薩摩藩士」を以て、青森口総督府参謀と為す。(蝦夷戦記)
明治2年3月9日	海軍参謀増田明道、諸艦を率いて品川海を發す。(蝦夷戦記)
明治2年3月11日	薩摩、水戸二藩兵、青森に至る。「慶応出軍戦状、津軽旧記」(蝦夷戦記)
明治2年3月13日	親兵三番大隊を發して、箱館第二応援兵と為す。(蝦夷戦記)
明治2年3月18日	諸艦宮古港「陸中閉伊郡」に抵る。(蝦夷戦記)
明治2年3月25日	是より先、榎本武揚等、官艦宮古港に至ると聞き、軍艦数隻を發して、之を逆撃せしむ、是に至り、賊艦八戸近海に出没す、八戸藩、書を督府に上りて、其状を申す、督府乃ち使を宮古港に遣して、諸艦を戒め、不虞に備へしむ、使者未だ達せず、是日早旦、賊艦一隻「回天艦」、宮古港に來り襲ふ、官艦邀へ撃て之を破り、追躡して洋中に至る、及はず、賊の他艦「高尾艦」に壇浦「宮古港を距る十九里許」に逢ふ、賊、艦を火き、陸に上て走る、戊辰艦も亦、砲に中て毀損す、因て品川海に返る、海軍参謀増田明道、乃ち盛岡藩に令して、通賊を輯捕せしむ、既にして通賊九十余人、盛岡藩に因て降を乞ふ、乃ち其兵器を収め、盛岡藩をして東京に護送せしむ。(蝦夷戦記)
明治2年3月26日	海軍参謀増田明道、諸艦を率いて青森に抵る。(蝦夷戦記)
明治2年3月27日	是より先、外国商船三隻「普国船ヤンクチ号、英国船オーサカ号、米国船ヤンシー号」を雇て、運輸船と為し、青森に差遣す、是日、青森港に至る。(蝦夷戦記)
明治2年3月29日	松前兼広、再び書を朝に上り、米五万苞を借りて、邑民を撫恤せんことを請ふ、是日米三万苞を貸与す。(蝦夷戦記)
明治2年3月29日	総督、甲鉄艦に駕し海軍を關す、又各艦長を召見して、宮古港の戦功を賞す、是日、諸藩兵に令して軍略を具陳せしめ、又斥候船の暗号を定む。(蝦夷戦記)
明治2年3月30日	箱館の賊、内地に來侵の虞あり、且三陸の地、猶殘賊潜匿の聞あるを以て、三等陸軍將久我通久「大納言」を以て鎮撫総督と為し、兵「一大隊」を率いて仙台に赴かしむ、又朝陽艦「艦長中牟田倉之助」を青森に差遣す。(蝦夷戦記)
明治2年4月2日	四月二日、是より先、肥後藩、弘前藩の急を聞き、朝に奏し、兵を發して之を援ふ、是日、藩兵「百五十四人」弘前に至る、尋て青森に転す、黒石藩も亦、兵「二小隊」を青森に出し、弘前藩兵に属す。(蝦夷戦記)
明治2年4月4日	四日、督府、海軍既に至るを以て、大挙して賊巢を進剿せんとなす、乃ち陸軍参謀山田顕義を以て、海軍参謀を兼しめ、森政知「清蔵、○長門藩士」を陸軍副参謀と為し、前田某「雅樂」、今井弘「亮介、○二人並に族籍未詳」を軍監と為し、有地某「志津摩、○長門藩士」を監軍と為し、先鋒長門、福山、弘前、徳山、大野、松前六藩兵、及び甲鉄、春日、陽春、丁卯、飛龍、豊安、晨風七艦を率いて音部村「江刺を距る三里十八町」に赴かしむ、因て海陸諸軍を戒めて、勝を一戦に制せしむ。(蝦夷戦記)
明治2年4月6日	六日、陸海軍参謀山田顕義、海陸諸軍を率いて青森を發し、音部村に向ふ。(蝦夷戦記)
明治2年4月9日	九日、官艦、音部村近海に至り、陸軍を發して村中に入る、賊、山上より拒撃す、官軍直に進て之を走らす、既にして分て三道に進む、長門、福山、弘前、徳山、大野、松前六藩兵は海道江刺に向ひ、長門、福山、弘前、松前四藩兵は山道鶴村に赴き、松前藩兵は熊石村に進む、江刺の賊、厚沢部川渡口に拠守す、官軍路を分て進み攻む、官艦、亦横撃して陸軍を援く、賊兵大に潰ゆ、官軍遂に江刺を定む、既にして官艦三蔵港「陸奥津軽郡」に赴く、途松前近海を過ぐ、賊、巨砲を發して、戦を挑む、官艦之に應ず、少時交綏す。(蝦夷戦記)
明治2年4月10日	十日、曾我祐準「準造、○柳河藩士」を以て海軍参謀と為し、青森に差遣す。(蝦夷戦記)

明治2年4月10日	江刺の官軍、兵を分ち、長門、弘前、徳山、松前、四藩兵は松前口に向ひ、長門、福山、弘前、大野、松前五藩兵は木古内口に進む。是日、松前口の軍、賊兵を江良町に撃て之を走らす。(蝦夷戦記)
明治2年4月11日	督府、第二軍長門、津、備前、筑後四藩兵を發して、江刺に赴かしむ。(蝦夷戦記)
明治2年4月11日	松前口官軍、進て根部田村に至る。黄昏、賊兵来り襲ふ、官軍利あらず、退て賊を赤神、雨垂石、茂草等諸村に拒み、苦戦曉に達す、遂に敗れて小砂子村に退守す、賊、進て江良町に入る、既にして之を棄て、松前に退く。(蝦夷戦記)
明治2年4月11日	十一日、伏見親兵「第一第二大隊」を箱館に發遣す。(蝦夷戦記)
明治2年4月12日	督府、箱館府権判事堀義彦を以て參謀と為し、村橋某「直衝○薩摩藩士」を軍監と為す。(蝦夷戦記)
明治2年4月12日	味爽、木古内口官軍、進て賊兵を木古内に攻む、克たす、退て笹小屋に次す、午牌、賊兵来り襲ふ、官軍邀へ撃て之を破り、追躡して木古内に逼る。(蝦夷戦記)
明治2年4月12日	飛龍艦、福山近海を過く、賊、巨砲を發して戦を挑む、官艦之に応ず、少時戦を収めて退く、是夜、晨風艦、龍鼻崎「陸奥津輕郡」の暗礁に触れて摧破す。(蝦夷戦記)
明治2年4月12日	第二軍、江刺に至る、乃ち兵を分ち、長門藩兵は稲倉石に進み、津、筑後二藩兵は松前口に向ひ、備前藩兵は木古内口及び鶉村に赴く。(蝦夷戦記)
明治2年4月13日	鶉村の官軍、進て二股口に向ふ、是日、賊兵を中二股に破り、追撃して下二股に逼る、賊、山上の壘に拠て力拒す、終夜戦争止まず、曉に於て官軍利あらず、稲倉石に退く、既にして再び中二股に進み、賊と相持す。(蝦夷戦記)
明治2年4月13日	仙台、長岡連賣の徒三百五十余人、海に航して箱館に至り、榎本武揚等の軍に投す。(蝦夷戦記)
明治2年4月13日	味爽、木古内口官軍、再び賊兵を木古内に攻む、賊、壘に拠て拒き戦ふ、官軍利あらず、笹小屋及び湯岱に退守す。(蝦夷戦記)
明治2年4月14日	督府、備前藩兵「二十人」を分て、陽春艦に搭せしむ。(蝦夷戦記)
明治2年4月15日	陸海軍參謀山田顯義、書を青森本營に飛して後軍を促す、督府、乃ち參謀黒田清隆、大田黒惟信をして、第三軍薩摩、長門、水戸、備前、筑後、福山、弘前、徳山、松前九藩兵を率いて江刺に赴かしむ、是日、朝陽艦青森港に至る、乃ち旧箱館府兵「二十人」を分て之に搭せしめ、三厩港に遣して諸艦に合せしむ。(蝦夷戦記)
明治2年4月16日	總督、書を軍務官に致して、海陸軍軍需匱乏の状を告げ、速に之を運輸せんことを促し、且運輸船及び判事の海軍に長せし者を派遣せんことを請ふ、明日、參謀も亦、賊勢猖獗の状を報し、精兵千人を發遣せんことを請ふ。(蝦夷戦記)
明治2年4月16日	松前口官軍の斥候兵、賊兵と江良町に戦ふ。(蝦夷戦記)
明治2年4月16日	官艦、進て箱館港口に至り、賊状を偵察す、賊、海陸備を敵にして、以て待つ、官艦、乃ち室蘭に向ふの状を示し、転して三厩港に返る。(蝦夷戦記)
明治2年4月16日	第三軍、江刺に至る、乃ち兵を分ち、薩摩、長門、備前三藩兵は木古内口に向ひ、薩摩、長門、水戸、備前、徳山、五藩兵は二股口に進み、長門、備前、福山、弘前、松前五藩兵は安野呂口に赴き、水戸、筑後、松前三藩兵は松前口に向ふ。(蝦夷戦記)
明治2年4月17日	官軍海陸並進て、賊兵を江良町及び折戸、立石野等諸処に破り、直に福山城に逼る、賊兵支へず、城を棄て走る、官軍、乃ち福山城を復し、明日、進て吉岡、福島二村を定む。(蝦夷戦記)
明治2年4月18日	督府、海軍參謀増田明道をして、旧箱館府兵及び弘前藩兵を率いて、松前に赴かしむ。(蝦夷戦記)
明治2年4月18日	督府、弘前藩兵に命して、牙宮を警守せしむ。(蝦夷戦記)
明治2年4月19日	賊艦、木古内近海に至る、官艦、進て之に逼る、賊、戦はずして走る、官艦、追躡して箱館港口に至る、及はずして退く。(蝦夷戦記)
明治2年4月20日	木古内口官軍、曉霧に乗して木古内の賊壘を攻む、賊兵、支へず、泉沢村に走る、官軍、追撃して札刈村に至り、軍を収めて木古内に退く、賊、海陸兵を返して来り戦ふ、松前の敗賊、亦知内村より来て官軍を夾撃す、官軍利あらず、笹小屋及び稲尾峠に退守す、賊、再び木古内に入る、既にして之を棄て、矢不來に走る。(蝦夷戦記)
明治2年4月20日	賊艦、再び木古内近海に至る、官艦、進て之を撃つ、賊、遁れて箱館港に入る、官艦、乃ち戦を収めて退く。(蝦夷戦記)
明治2年4月22日	木古内口官軍、進て木古内に至る、松前口官軍来会す、乃ち軍を進めて三石村に次す。(蝦夷戦記)
明治2年4月22日	督府、海軍參謀曾我祐準を松前に差遣す。(蝦夷戦記)
明治2年4月23日	黄昏、二股口官軍、賊兵を下二股に攻む、賊兵力め拒く、終夜戦争止まず、天既に明く、賊、進て官軍に突入す、官軍少く退く、監軍駒井忠仲、衆を励して返し戦ふ、遂に之に死す、賊、退て下二股の壘に拠る、官軍、奮撃夜半に至る、賊勢屈せず、乃ち兵を中二股に收む。(蝦夷戦記)
明治2年4月24日	官艦、進て箱館港に入り、賊艦、及び弁天崎の砲台を攻む、賊、水雷火を設くるの虞あり、且港内水浅きを以て、深入を得ずして退く、是日、陸地の官軍、当別村に至り、將に海軍を援けて進み戦んとす、賊、茂辺地村に拠り、敵備して以て待つ、官軍、乃ち釜石村に退守す。(蝦夷戦記)
明治2年4月24日	賊兵、三石村を襲ふ、官軍、撃て之を却く。(蝦夷戦記)
明治2年4月27日	總督、牙宮を江刺に移さんとす、是日、青森を發す、弘前藩兵「百八十三人」之に属す。(蝦夷戦記)
明治2年4月28日	總督、江刺に抵る、松前藩兵「一小隊」を出して牙宮を警守す。(蝦夷戦記)
明治2年4月28日	官艦、進て当別村に至る、黄昏、賊兵来り襲ふ、官軍、撃て之を却く。(蝦夷戦記)
明治2年4月29日	官軍、海陸並進て、賊兵を茂辺地及び矢不來に攻む、賊、壘に拠て力め拒く、官軍、激闘之を破り、追撃して富川村に至る、賊、走て有川村に拠る、時に賊艦、箱館港より来り戦ふ、官艦撃て之を走らす、既にして陸地の官軍、長驅して有川村に逼る、賊、遂に七重村及び五稜郭に走る、二股口の賊、亦退て五稜郭及び箱館を保す、是時に當り、賊艦、毎戦利あらず、將に箱館港を脱去せんとするの聞あり、官艦乃ち港口を鎖し、敵に之を守る。(蝦夷戦記)
明治2年5月1日	二股口官軍、賊と中二股に相持すること数日、是日、賊已に退くを以て、進て一渡、大野二村に至る、有川口官軍、亦兵を分て七重浜に進む。(蝦夷戦記)
明治2年5月1日	督府、諸藩兵矢不來の戦功を賞して、酒肴を賜ふ。(蝦夷戦記)
明治2年5月1日	戦艦一隻「千代田形艦」、弁天崎の暗礁に触る、賊、之を棄て遁る、官軍之を収む、是夜、賊艦「蟠龍艦」の逃兵七人、陽春艦に就て降を乞ふ。(蝦夷戦記)
明治2年5月2日	延年艦「肥前藩艦、艦長澤野虎六」を箱館に差遣す。(蝦夷戦記)
明治2年5月2日	賊兵、曉に乗して七重浜を襲ふ、官軍利あらず、有川村に退守す、賊、七重村を焼て去る、天明、官軍兵を分て、七重、大川二村に進む、二股口官軍来会す、乃ち海軍に報して、其応援を促す、官艦、乃ち箱館港に入り、賊艦及び弁天崎の砲台を攻む、陸軍進まざるを以て、戦を収めて退く、是日、二股口の軍兵を分て石川村に至り、賊の斥候兵と戦ひ之を走らす。
明治2年5月4日	安野呂口官軍、進て落部村に至る。(蝦夷戦記)
明治2年5月4日	箱館府民連藏等、潜に弁天崎の砲台に入り、其砲に釘し、其状を官艦に報す、官艦、乃ち箱館港に入り、賊と戦ふ、賊、紐を海中に張り、其進入を碍ゆ、官艦、遂に深く入るを得ずして退く。(蝦夷戦記)
明治2年5月4日	賊兵、曉に乗して大川村及び七重浜を襲ふ、官軍、邀へ撃て之を走らす。(蝦夷戦記)
明治2年5月5日	親兵「第二大隊一番中隊右小隊」を箱館に差遣す。(蝦夷戦記)
明治2年5月5日	總督使を病院に遣して、傷者を慰問す。(蝦夷戦記)
明治2年5月6日	海軍參謀、書を軍務官に致して、運輸船を派遣せんことを請ふ。(蝦夷戦記)
明治2年5月7日	海軍陰に商船「虎房号、住吉号、子日号三船」の水夫を募て、箱館港の沈櫃を載る、是に於て、大挙深入の策を決す、味爽、官艦進て港内に入り、賊艦及び弁天崎の砲台を攻む、賊兵、殊死して戦ふ、既にして賊艦一隻「回天艦」、砲に中て毀損し、沙汀に膠す、官艦、直に進て之に薄る、賊、遁れて陸に上る、官艦、乃ち戦を収めて退く。(蝦夷戦記)
明治2年5月8日	賊兵、曉に乗して大川村を襲ふ、官軍、邀へ撃て之を破り、追躡して赤川、石川二村に至る。(蝦夷戦記)
明治2年5月8日	安野呂口官軍、進て七重、大野二村に至る、是に於て、諸路の官軍、悉く合して一と為る。(蝦夷戦記)
明治2年5月9日	松前兼広、青森より福山城に復歸す。(蝦夷戦記)

明治2年5月9日	海軍参謀、朝陽、丁卯二艦をして、箱館港出入の船舶を譏察せしめ、陽春艦を七重村近海に置いて、陸軍の応援に充つ。(蝦夷戦記)
明治2年5月10日	延年艦、青森港に至る。(蝦夷戦記)
明治2年5月10日	督府、軍中役夫、及び馬匹の制限を更定す。(蝦夷戦記)
明治2年5月11日	薩摩藩兵「兵員詳かならず」を箱館に發遣す。(蝦夷戦記)
明治2年5月11日	総督、江刺を發し、湯台に次す。(蝦夷戦記)
明治2年5月11日	海陸官軍、大挙して箱館及び五稜郭を進撃す、陸軍分て七重、大川両道より進み、別に兵を繞らして、山脊泊、寒風川より箱館の背を衝かしむ、黎明、箱館口の軍、海に航して山脊泊、寒風川に至り、分道進討、一は海軍と特角して、弁天崎の砲台を攻む、堅てはけず、一は賊兵を箱館山及び箱館に撃ち、北くるを追て一本木に至る、賊、千代岡より返戦す、官軍撃て之を却く、七重、大川両道の軍、亦海軍と相応して、賊兵を桔梗野、権現山、亀田、赤川、神山等諸処に破り、箱館口の軍と並進て、五稜郭及び千代岡に逼る、時に官艦、賊艦と大に箱館港に戦ふ、朝陽艦、砲に中て焼没す、既にして延年艦、青森より来り、諸艦を援けて賊艦を撃ち、其二艦「回天、蟠龍二艦」を焼く、是に於て、賊、悉く船艦を喪ひ、僅に五稜郭、千代岡、弁天崎の三所を保つ、官軍、攻撃甚烈し、賊、亦殊死して戦ふ、一昼夜間砲声止まず。(蝦夷戦記)
明治2年5月12日	海陸官軍、五稜郭、千代岡、弁天崎を連攻す、賊兵拒き戦ふ、数日、戦争止まず。(蝦夷戦記)
明治2年5月12日	総督、湯台を發し、泉沢村に次す。(蝦夷戦記)
明治2年5月13日	総督、泉沢村を發し、有川村に次す。(蝦夷戦記)
明治2年5月14日	官軍、賊の病院の箱館に在る者を収め、其医師をして、朝旨の在る所を榎本武揚等に伝へしめ、又使を遣して之を招降す、武揚従はず、且官軍に贈るに、其曾て蘭国に遊び学ぶ所の海律二冊を以てす。(蝦夷戦記)
明治2年5月14日	総督、七重、赤川、神山等諸村を巡視し、諸軍を犒ふ、既にして有川村に帰る。(蝦夷戦記)
明治2年5月15日	海陸官軍、五稜郭、千代岡、弁天崎を連攻し、又使を遣して、弁天崎の賊を招降す、是日、弁天崎の賊、永井尚志以下二百四十人降を乞ふ、上湯川村の賊、三百四十余人も亦降る。(蝦夷戦記)
明治2年5月15日	督府、肥後藩兵の青森に在る者に命して、速に来て官軍に応援せしむ、藩兵乃ち富川村に至る。(蝦夷戦記)
明治2年5月15日	総督、使を箱館に遣して、諸軍を犒ふ。(蝦夷戦記)
明治2年5月16日	海軍参謀、酒五樽を榎本武揚に贈りて、其海律を贈りしに酬ふ。(蝦夷戦記)
明治2年5月16日	黎明、官軍、海陸相応して、千代岡を攻め、一鼓して之を抜く、賊五稜郭に走る、官軍、隨て五稜郭を囲む、是日、総督、箱館及び千代岡を巡視し、諸軍を犒ふ、既にして有川村に帰る。(蝦夷戦記)
明治2年5月17日	官軍、五稜郭を連攻す、賊、兵力竭く、是日、榎本武揚、松平正親等降を乞ふ、陸軍参謀黒田清隆、海軍参謀増田明道等、乃ち亀田に至り、武揚等を召見して、謝罪の実効を責む、武揚等、明日五稜郭、及び兵器を致して、罪を軍門に待んと請ふ、是に於て諸軍に令して、其攻撃を止む。(蝦夷戦記)
明治2年5月18日	榎本武揚、松平正親以下一千余人、五稜郭を致し、軍門に詣て罪を待つ、監軍有地某「志津摩」、軍監前田某「雅楽」等、諸藩兵を亀田の營に整列して、其降を受く、乃ち五稜郭及び兵器を収め、武揚等を箱館に護送し、寺院に謹慎して、朝裁を待たしむ、武揚等兵を起してより八閏月、是に至り始て平定す。(蝦夷戦記)
明治2年5月19日	総督、牙營を箱館に移し、海軍に令して祝砲を發し、箱館地方平定を賀す、英、米二国軍艦の港内に在る者、亦応發す。「英艦又祝砲を發し、其国皇の即位節を賀す、陽春艦為に應發す。」(蝦夷戦記)
明治2年5月19日	督府、軍監前田某「雅楽」に命して、降人を監せしめ、諸藩兵を分て箱館、五稜郭、弁天崎等、諸処を警戒す、又諸藩に令して、音部進撃以降の戦状、死傷者及び兵士、役夫の人員等を録申せしむ。(蝦夷戦記)
明治2年5月19日	松平定敏、箱館より横浜に至り、自首して罪を乞ふ、乃ち徳川徳成「三位中将○尾張藩主」に付して、之を監守せしむ。(蝦夷戦記)
明治2年5月19日	朝陽艦の箱館港に焼没するや、英国軍艦「パール号」港内に在りて、其溺兵を救ふ、是日、督府、物を艦長以下に贈りて、其勞を謝す。(蝦夷戦記)
明治2年5月20日	督府、海軍参謀増田明道、陸軍副参謀森某「清蔵」等を東京に遣して、箱館地方戡定の状を報す。(蝦夷戦記)
明治2年5月20日	弁天崎の賊、永井尚志以下二百四十人、軍門に出降る、軍監前田某「雅楽」等、其降を受く、乃ち砲台及び兵器を収め、尚志等をして箱館の寺院に謹慎して、朝裁を待たしむ。(蝦夷戦記)
明治2年5月20日	箱館居留の仏国人、其公使に就て、其家宅、官軍の占有する所と為りしを訴ふ、軍務官乃ち督府に移牒して、嚴に諸軍を戒め、暴行を外国人に加ふる事勿らしむ。(蝦夷戦記)
明治2年5月21日	箱館地方平定に就くを以て、督府、諸藩兵の戦功を慰賞し、令して之を班し、伏見親兵「二中隊」、旧箱館府兵「一中隊」、及び弘前「二中隊砲四門」、松前「一中隊」二藩兵を留めて、箱館地方を警戒せしめ、監軍和田某「慎之助」、有地某「志津摩」をして之を監せしむ、又榎本武揚、松平正親以下七人を東京に押送し、肥後藩兵をして之を監せしめ、降兵六百十二人を青森に移置し、弘前藩をして之を監守せしむ。(蝦夷戦記)
明治2年5月21日	督府、祭壇を大森浜に築き、戦死者「二百十八人」を弔祭し、海陸軍に令して、弔砲を發す、又將に招魂所を箱館に造營せんとするを以て、諸藩に申令して、戦死者の姓名を録申せしむ。(蝦夷戦記)
明治2年5月23日	督府、留戍兵を分て、箱館及び五稜郭、千代岡、弁天崎、湯川等、各所を警戒す。(蝦夷戦記)
明治2年5月24日	総督、各艦長を召見して、其戦功を慰賞し、延年艦を箱館港に留め、余は皆之を班す。(蝦夷戦記)
明治2年5月25日	軍務官、使を遣して、海陸諸軍を犒ひ、酒百樽を賜ふ。(蝦夷戦記)
明治2年5月25日	箱館地方、既に平く、而して室蘭の賊、未だ降らず、是日、室蘭の賊沢貞説等、使を箱館に遣して降を乞ふ。(蝦夷戦記)
明治2年5月26日	板倉勝勝、箱館より東京に至り、戸田忠友に就き、自首して罪を乞ふ、乃ち板倉勝勝「主計頭○安中藩主」に付して、之を監守せしむ。(蝦夷戦記)
明治2年5月27日	督府、旧箱館府兵の朝陽艦に駕し、戦没せし者「九人」の遺族に香花料を賜ふ。(蝦夷戦記)
明治2年5月28日	箱館府民、連蔵等の弁天崎砲台の砲に釘するや、順三郎なる者、賊の捕殺する所と為る、是日、督府、連蔵等の功を賞して、金を賜ひ、順三郎の遺族に香花料を賜ふ、又商船「虎房号、住吉号、子日号三船」水夫の、箱館港の沈組を截りし功を賞して、金を賜ふ。(蝦夷戦記)
明治2年5月29日	東京訛伝す、室蘭の賊、対馬を侵すと、軍務官、乃ち河内艦を發して之を討せしめ、箱館海陸軍参謀に令して、軍艦二隻を東京に班さしむ。(蝦夷戦記)
明治2年6月1日	諸藩兵、前後東京に凱還す、勅して之を慰勞し、本藩に罷歸す。(蝦夷戦記)
明治2年6月5日	各艦品川海に凱還す、勅して之を慰勞す、尋て令して諸藩艦を解還す。(蝦夷戦記)
明治2年6月10日	海陸軍参謀以下、前後箱館を發して、東京に凱還す、是日、天皇、参謀以下各艦長等を召見して、親から之を慰勞し、酒肴を賜ふ。(蝦夷戦記)
明治2年6月12日	蝦夷地戡定に就くを以て、箱館府知事清水谷公考の青森口総督を罷む、是に於て、海陸軍参謀以下皆罷む。(蝦夷戦記)
明治2年6月12日	軍務官に令して、箱館降人を処分せしむ、既にして榎本武揚、松平正親等、東京に至る、之を軍務官に拘す。(蝦夷戦記)
明治2年6月12日	室蘭の賊、沢貞説以下三百余人、軍艦二隻「鳳凰、長鯨二艦」に駕して、箱館港に至り、謹慎して罪を待つ、督府乃ち其役夫を宥して、招魂所造營の工夫に充つ、尋て貞説以下百八十四人を東京に押送し、備前藩兵の猶箱館に在る者をして、之を監せしむ、既にして貞説等東京に至る、之を軍務官に拘す。(蝦夷戦記)

旧幕府脱走軍組織図(1)

列士満	6	7	7	7	8	10	12	12	16	20	21
満調	00	30	00	30	45	00	00	45	00	15	00
練日	起	床	朝	掃	整	会	番	兵	昼	夕	点
課表			食	除	頓	兵	議	交	代	食	頓
			呼	整	頓	兵	議	交	代	食	呼
			起	掃	整	会	番	兵	昼	夕	点
			床	除	頓	兵	議	交	代	食	呼
			起	掃	整	会	番	兵	昼	夕	点
			床	除	頓	兵	議	交	代	食	呼

フラン
ス士官

隊長
ブリュネ

通弁
飯高平五郎
福島時之助
田島金太郎

陸軍奉行添役
※添役は軍監又は監
軍ともいう。

大野右仲 沢沢成一郎 牧野主計
堀寛之助 忠内次郎三 宮路仙之助
大島寅雄 沢六三郎 金成善右衛門
安富才助 津田主計 佐久間隆治
今井信郎 菰田元次 岡本柳三

陸軍奉行添役
武田錠三郎 山名善次郎 服部栄太郎
木原又兵衛 川崎準三郎 中村勇次郎
大島友之助 栗原重藏 原俊太郎
竹中小吉郎 野村利三郎 金子八十八
鈴木大藏 大場長介 関清介

五稜郭週番当直

丸毛牛之助、島山五郎七郎、鈴木始三郎

支那人掛 岡本柳三 清国人41人

※列士満 = regiment (レジマン)、フランス語で連隊の意、編成は明治2年正月頃

探索方
兵1,000人
(伝習隊 額兵隊 彰義
隊 神木隊 衝鋒隊 杜
陵隊)

小芝長之助
加藤昇太郎

改役、頭取等主な隊士
内田量太郎
大館昇一郎
石井八弥 井上文次 布目又兵衛

陸軍奉行 大島圭介
同 並 土方歳三
兼海陸軍裁判役頭取
箱館市中取締

頭取及び組頭

箱館奉行 永井玄蕃
同 並 中島三郎助

杉浦清介
佐藤真司
大岩啓之助

箱館守備兵300人
(新撰組 士官隊 砲兵隊 工兵隊)
仏人(フォルタン マルラン
ラジェ トリブクラトウ)

佐藤政之助
内田庄司
高橋弥吉
横地秀次郎
伊藤鏡五郎

會計奉行 榎本対馬
同 川村録四郎

須藤健藏

連隊名	連隊長	大隊長	大隊長名	小隊長	原隊隊長名 (列士満編成前)	改役、頭取等主な隊士
第一列士満	フォルタン	第一大隊	滝川充太郎	伝習士官隊 一~二番 小影義隊 三番 神木隊 四番	滝川充太郎 小林清五郎 酒井良輔	鈴木蕃之助 大館昇一郎 石井八弥 井上文次 布目又兵衛
第二列士満	欠	第二大隊	伊庭八郎	遊撃隊 一~二番 新撰組 三番 彰義隊 四~七番	大岡幸次郎 のち伊庭八郎 森常吉 波沢成一郎 のち池田大隅ら	岡田峯吉 柴田真一郎 本山小太郎 杉田金太郎 (会津) 諏訪常吉 柏崎才一 角田礼 島田魁 菅沼三五郎 荒井鏡太郎 大塚鶴之丞 木下福次郎 寺沢新之助 秋元虎之助 岩藤乙太郎 陸路千之助 本多幸七郎 伝習歩兵隊
第三列士満	マルラン	第一大隊	大川正次郎	一~四番	本多幸七郎 のち大川正次郎	鈴木金次郎 手代塚頼負 山口朴郎
第四列士満	カズスーヴ 欠	第二大隊	松岡四郎次郎	一~五番	松岡四郎次郎	三木軍司 横田豊三郎 為貝金八 奥山八十八郎 高木庄次郎 松下周之助 今井八郎 小原弘造 千葉礼
第五列士満	ブッフイエ 古屋佐久左衛門	第一大隊	永井蠶仲齋	一~五番	古屋佐久左衛門 副 今井信郎	浅井俊郎 鈴木俊郎 秋山繁松 牛田勝藤 川合卓郎 酒井兼三郎 塩島松太郎 友野栄之助 友部鐘三郎 二木寛五郎 高木橙吉郎 元井和一郎

五稜郭配備大砲(廿四斤砲)の人員配置

一番二番砲	朝夷健次郎	玉虫平四郎
二番三番砲	金沢弥太郎	宮本四郎次郎
三番四番砲	大塚朝五郎	鳥山三郎
四番五番砲	吉益恒太郎	林庄三郎
五番六番砲	堀口庸三郎	矢田堀常太郎
六番七番砲	大畑伝一郎	鈴木茂兵衛
七番八番砲	近藤熊吉	岩橋新吾
八番九番砲	浮洲崔之助	田村兵三郎
九番十番砲	内藤実造	横田長之助

旧幕府脱走軍組織図(2)

松前奉行 八見勝太郎	町田肇
守備兵 400人 八人カズスローブ	(遊撃隊 砲兵隊 工兵隊)
江差奉行 松岡四郎次郎	伊藤誠五郎
同 並 小杉雅之進	(兼務)
守備兵 350人 八人ブツアイエ	
(一聯隊 砲兵隊 工兵隊)	
開拓奉行 沢太郎左衛門	上原七郎
開拓方室蘭駐屯 200人	木村惣造 武田司 雑賀孫六郎 樋野恵太郎

列士満の枠外の隊

箱館病院	院長 高松凌雲	掛頭取 小野権之丞
分院 (高龍寺)	医師 赤城信一	掛 木下雄藏

その他の守備地

鷲ノ木〜川汲の海岸線、長万部等 (衝鋒隊半隊)
石崎、湯川 (小杉義隊)、有川 (伝習歩兵隊)
小樽内 (西村賢八郎 武田司)
石狩、歌葉にも配置

海軍奉行 荒井郁之助

宮古港 奇襲作戦	三艦乗組 陸軍
参加 フランス人	(切り込み隊)
回天 ニコロール	新撰組 神木隊 彰義隊
高尾 コラシユ	神木隊
蟬龍 クラウトウ	彰義隊 遊撃隊

◎印は品川出帆時の艦隊。
☆印は仙台から艦隊参加。
△印は南部沖で奪取後艦隊参加。
★印は元年10月箱館港で奪取後艦隊参加。
原名アシエロケット、別名第二回天。
※ 軍艦はゴジック、その他は輸送船。

隊名	隊長名	備考	頭 改役、頭取等
砲兵隊	関広右衛門	一分隊 松前駐屯分隊長 二分隊 江差駐屯分隊長 三分隊 木古内駐屯分隊長 四分隊 函館?駐屯分隊長	狩谷秀藏 飯田兼吉 小沢金弥 中山豊之助 小沢留吉 吉江久吉 長尾勝藏 小宮山金藏 小菅辰之助 山田道之助 友成将監 池田伝
工兵隊	吉沢勇四郎	一〜三番 騎兵方頭取 奥田長藏	大塚重之助 横尾治兵衛 大条四郎 南条武藏之助 片山源五左衛門
器械隊	宮重一之助	器械方頭取 貝塚道次郎	柴田伸助 中島恒太郎 佐々倉松太郎 直井友之助
騎兵隊	伊藤善次	2年2月中南部藩士で編成	氏家清記 鈴木男也 間鬼太夫 狩野慶介
杜陵隊	二関源治	2年4月箱館へ渡海 (仙台藩士)	近藤彦吉 朝夷三郎 平田銃吉郎 福西脩太郎
見国隊	中島三郎助	千代ヶ岡陣屋守備隊 (元浦賀同心衆)	
中島隊			

記号	船名	艦長	備考	主な乗組員
◎	開陽	荒井郁之助	元年11月江差港で座礁沈没	根津勢吉 小杉雅之進 近藤熊吉 上原七郎 新宮勇 大塚波次郎 岩橋新吾 林董三郎
◎	神速	西川真藏	元年11月江差港で座礁沈没	鈴木清三郎 阪本隣之助 大塚朝五郎 内藤実造
◎	回天	甲賀源吾	2年5月箱館港で自焼	矢作平三郎 浅羽幸次郎 渡辺折三 新宮勇 古川庄八 大塚波次郎 上田真吉 安藤太郎
★	高尾	小笠原賢藏	2年3月宮古港の北で自焼	西川真藏 辻勇五郎 横田勇之助 北川常藏 名村一郎 大沢亀之丞 松村金七郎 加藤桑藏
◎	蟬龍	古川節藏	2年5月箱館港で自焼	松平五左衛門 蘆田退三 伴繁三郎 原田彦右衛門
◎	千代田形	森本弘策	元年9月庄内へ応援、11月箱館へ	市川真太郎 矢田堀常太郎 林倫平 吉益恒太郎 鳥山三郎
☆	大江	小笠原賢藏	2年4月青森で新政府軍緊留調査	塚本録助 徳田祥太郎 大塚久平 近藤庫三郎
◎	長鯨	浅羽甲次郎	2年6月傷病兵を東京に送る	永田義次郎 仙石虎次郎 丹下集之助 飯田市太郎 矢島大助 栗野虎三郎 玉虫平四郎 高橋平吉
☆	鳳凰	未詳	鷲木浜入港後の消息未確認	岡田宇右衛門 (森町靈鷲院名簿) ※糧米を積む 古川節藏 榎井楢吉 加藤桑三
☆	長崎	柴 誠一	元年9月酒田沖飛島で座礁、降伏	石塚銃太郎 山田清五郎 伊庭八郎 斎藤辰吉
◎	美嘉保	宮永扇三	元年8月銚子沖で座礁沈没	※糧米を積む
△	回春	未詳	旧名千秋、元年10月南部沖で奪取	春山弁藏 長谷川得藏 長谷川清四郎 春山敏平
◎	威臨	小林文次郎	鷲木浜入港後の消息未確認 元年8月清水港で奪取さる	加藤常次郎 今井幾之助

「函館脱走海陸惣人名」(『旧幕府』), 『説夢録』, 「感旧私史」, 「函館毎日新聞」連載), 「夢もの語」, 「蝦夷事情乗風日誌」等より作成 (2006. 9. 15)

新政府軍組織図

青森口總督府 會議所

海陸軍參謀 山田市之允 顯義 (長・1.11.9)

軍監 林半七友幸 (長・1.11.12) 前田雅業正之 (十・2.4.4) 野田大藏 齋通 (熊・1.1.14) 今井亮介 弘 (長・1.12.11) 村橋直衛 (長・1.12.11) 田島敬藏 (長・2.5.-)

監軍 岸良彦七直養 (長・1.12.11) 有地志津摩 (長・2.4.4) 駒井政五郎 忠仲 (長・1.12.11) 三刀屋七郎次 (?・2.?) 松本鼎造 (長・1.12.11) 岩淵彦吉 (弘・1.12.11) 山岡源左衛門 (福・1.12.11) 和田植之介 (鳥・1.12.11)

() 内は所属藩と任命月日で、長は長門、薩は薩摩、熊は熊本、弘は弘前、鳥は鳥取、高は高取、佐は佐賀、柳は柳川、広は広島、徳は徳島藩の略、十は十津川郷士である。※軍監も監軍も「いくさ目付」の職名であるが、軍監は昔の鎮守府の三等官でもあり、資料的にも上位にある場合が多い。

陸軍參謀 太田黒玄和 太惟信 (熊・1.12.11) 黒田了介 清隆 (薩・2.2.30) 堀真五郎 義彦 (長・2.4.12)

諸藩等の兵隊 有地志津摩 (長・2.4.4) 三刀屋七郎次 (?・2.?) 松本鼎造 (長・1.12.11) 岩淵彦吉 (弘・1.12.11) 山岡源左衛門 (福・1.12.11) 和田植之介 (鳥・1.12.11)

その他の職務としては、斥候、報小荷駄方、會計方、大病院、報知方、器械方、応接方、参謀付 属等がある。

△印は「此度へ出軍不致」との但書付の辞令を受けた者

新政府軍参加諸藩その他

藩名	隊長	兵員	藩名	隊長	兵員
長門	森清蔵	776	陸奥	弘前藩	254
備前	瀧川左近	566	薩摩	鹿兒島藩	103
備後	堀江但馬	268	肥後	熊本藩	852
伊勢	三田村上介	187			
備後	岡田伊右衛門	621			
越前	中村雅之進	166			

海軍參謀 増田虎之助 明道 (佐・2.2.25) 曾我準造 祐準 (柳・2.4.10)

海軍副參謀 石井富之助 齋吉 (佐・2.2.25)

軍艦	艦長	軍艦	艦長	輸送船	艦長
所屬	所屬	所屬	所屬	所屬	所屬
中島四郎	丁卯 山県久太郎	飛龍	岡敬三郎	飛龍	小山辰彦
朝廷 真・2.2.25	長門 長・2.2.25	朝廷 ?・2.2.25	徳島 徳・2.2.25	イギリス	2.3.-
朝廷 石井貞之進 忠亮	朝陽 中牟田倉之助	豊安 入江良之進	晨風 西田元三郎	ヤヅル	未詳
朝廷 佐・2.2.25	朝廷 佐・2.3.30	広島 広・2.2.25	久留米 久・2.2.25	ヤヅル	2.3.-
春日 赤塚源六	延年 沢野虎六	薩摩 薩・2.2.25	佐賀 佐・2.5.2	ブロン	2.3.-